

ランス verV

ヤミナギ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

車にひかれた男がルドラサウム大陸に転生する何百番煎じかも分からないお話。

ランスの双子の兄に転生した彼は、かつてあこがれた存在を目指して、ランスとは別の道に行く。

追い求めるのは力のみ。

魂の魄動の命じるが儘に。

I need more power (もつと力を)。

目次

プロローグ	1
Mission 01 力を求めて	15
Mission 02 未だ定まらぬ運命 の前日譚	28
Mission 03 胡蝶救いて、嵐に 向かわんや	41
Mission 04 閻魔刀	56
Mission 05 返礼にて相食む	70
Mission 06 妖怪王独眼流政宗	84
Mission 07 魔法学院にて	97
Mission 08 四天王試験	116
Mission 09 戦いの間に	129
Mission 10 魔物領野営地点	145
Mission 11 魔人ラ・サイゼル	157
Mission 12 理由	169
Mission 13 血の契約	179
Mission 14 魔王城の片隅で	

プロローグ

生まれ落ちて、そして死ぬ。

それはあらゆる生命体への共通項だ。

だからこそ悔しい。

いや、悔しいというのは嘘になる。

別段悔やむほどの人生を送ってこなかったから。

だからこそ、ああせめて、次の生が有るとするのならば……

「せめてかつこよく……」

そう言つて事故に巻き込まれた男の命は潰えた。

誰か少女を救うために。変わった服装の少女を救うために、全力でトラックの前に飛び出し、その少女と自分の場所を入れ替えた男の生はそこで終焉を迎え……

「ごめん。ごめん……僕のせいだから……」

そして誰かが、そんなことをつぶやいた。

そんな気がした。

や、しかしして転生なんてモノが有るといふのは信じがたい出来事だった。

少なくとも、この身に起きるとは思ってもいなかった。

気がついたときは中世の街外れ。弟と一緒に遊んでいるそのときに、唐突に過去の記憶が戻り。

その戻った瞬間の隙を突かれて頭に木の棒が直撃する。

「あはははは。やったぞ兄さん。これで僕の勝ち越しだ」

そう言つて笑う茶髪で口の大きな男の子。

名前は………ランス。

旅のレベル屋に才能限界を幾度計つて貰つても、計測不能という数字が出る規格外。

………さて、ランス？ 才能限界？ そして………レベル屋？

「ルドラサウム大陸？」

「あん？ 何言つてるんだ、兄さん？」

「兄さん？ 俺が………？」

「ま、まずい。ちよつと本気で殴りすぎた？ 兄さんの様子がおかしい。………いやだけど、兄さんには本気で挑まなきゃ勝てないし………」

こちらを心配そうな目で見つめてくる茶髪の少年。

そんな彼に心配をかけさせないようにと笑つて、頭をなでてやる。

少しばかり驚いた表情を見せるがなされるが儘になるその姿は年相応で、かわいらしくすら有る。

だけど大事ななそこではない。

この身が誰かの体に乗っ取ってしまったのかと罪悪感に駆られるが、思い出せるのは今の自分の人格とほとんど変わらない以前からの人格に、おぼろげな過去の記憶。となれば、乗っ取ったと言うよりも単純に記憶を思い出したという方が、この状況を説明するにはたやすい。

それに確かめなければならぬこともあった。それは目の前の少年が、いつかあこがれた英雄の幼き頃の姿で有ることの確認だ。

なすべき事、記憶の混濁で、頭の中がぐるぐると回る。

それは決して、たたかれた事による影響じゃない。自分が唐突に信じがたい状況に置かれると、考えが回らないらしいと言うことを彼は初めて自覚した。

そんなことを考えている間にランスが自分の頭をのぞき込んでくることに気づく。何だと首をかしげれば、ランスが素直にこっちに言葉を返してきた。

「兄さん。ここ、こぶになってる。冷やしといた方がいいよ」

「あ、ああ。それじゃあ、どこか近くの井戸にでも」

「井戸は街の中だし、近くに川が流れてるんだからそこで水汲んで冷やせば？」

「そうだな。そうさせて貰うよ」

「じゃ、案内するな」

そう言って立ち上がり自分を先導するるようにランスは森の中を歩いて行く。

それに付き従いながら、彼は理解できていないことに対して考えを巡らせていた。

それは自分自身の事に関してだ。

ランス。

彼が生まれた世界におけるエロゲの主人公。作中における大英雄にして稀代の女好き。

そのことには納得がいく。

この体を持つ知識と照らし合わせて、考えればそれが間違いないと受け入れられる。

理不尽に理不尽を重ねた状況ではあるが、そんな状況を何故か受け入れている自分が合った。それはこの世界で生まれ育って既に五年もたっているからか。その五年間で培われた人格は前世の記憶を取り戻しても消えることはなかったらしい。

しかし……

「ランスの双子の兄……か」

ひとり小さくつぶやく。

無論、血が繋がっているわけではない。

単純に同じ日にこの街に預けられたという事から双子扱いをされているだけの話だ。

尤も預けられたのはランスだけで、自分自身は捨て子だったのだから、自嘲に口元をゆがめる。

そしていくつかの疑問が浮かぶ。

まずは自分のこと。

ランスシリーズ原作にランスの兄なんて存在はいなかった。

ならば、自分自身は完全なイレギュラーであろうことが察せられる。ランス本編の中で、ランスの幼少期について語られていることはさほど多くはないが、少なくとも彼の兄を名乗る人物は現れていなかった以上、まず間違いないだろう。

またこの身も才能限界を測定できないとレベル屋に言われた記憶。

何より………

「ついたよ、兄さん」

「ああ。ありがとう」

「いいって事よ。久々に兄さんに勝って今の僕は機嫌がいいからね」

「そうか」

言いながら彼は川をのぞき込む。

綺麗な川だった。清流と呼べるような澄み切った水が流れている。

それを一掬いして、未だに熱を持つ頭の部位にかけてそのあと十分に冷えた手を押しつける、じんじんと痛む頭が少しばかりましになる。

そしてそれと同時に流れる川に自信の容姿が映し出された。

銀髪に青い瞳。

見慣れた。あるいはあこがれた存在の姿がそこにはあった。

「……………ダンテ」

「ダンテ？ 何の事だそれ」

「……………そうか。ならバージルか。そういえば俺はお前の兄だったな」

「いきなり自分の名前を言ったりしてどうしたんだよ、兄さん」

「……気にするな。それよりもそろそろ村長の家に戻ろう。これ以上遅くなると、また村長のご令嬢に文句を言われるからな」

「ちえつ……分かったよ、兄さん」

明らかに渋々といった様子でランスは街はずれに戻ると二人は共に村長の家へと歩み出した。

自然豊かな町外れを抜けてゴモラタウンの中心地へと向かう。

そこには彼らが世話になっているゴモラタウンの村長の家があった。

記憶が戻ってから数年の歳月が過ぎた。

流石に未来の主人公。

一緒にいると退屈しない。

大小様々な事が問題が次から次へと降りかかり、その尻ぬぐいがあるいは一緒になつて騒動をバージルは引き起こしていた。

それがいやなわけではない。

だが、同時に思うところがないわけでもない。

このままでいいのかとその身を焦がす焦燥感。

それが、気持ち悪いくらいにその身を焼き焦がす。

ランスの活躍は見てみたい。

彼と共に激動のルドラサム大陸を駆け抜けたという願望は確かにある。

そこに嘘はない。嘘はないが……

「チツ……」

舌打ちを一つこぼして、今日も今日とてバージルは剣を振るっていた。

扱うのはショートソード。

しかしながら八歳という年齢ではそのショートソードもバスタードソード並みの大きさに感じられる。

それを使って只管に剣を振るう。

脳裏に思い浮かべるのは、あこがれた存在が振るう斬撃。

その領域に踏み込んでいるなどは烏滸がましくてかけらも思えないが、それでも転生した肉体に才覚はあったらしい。齡八つにしては驚異的な鋭さを持って斬撃が振られる。

それを他者が見れば神童ともてはやすだろう。

既にいっばしの剣士として下級モンスターを狩ることさえ可能であろうその實力は、地味にランスにも影響を与えているのだがそのことを彼は自覚していなかった。

はぐれモンスターの出る森の中で二人だけの秘密の特訓。

それは確かに二人の血となり肉となりレベルとなって反映されていた。

ランスのレベルは現在3。バージルは4。

幼い子供であることを考慮すれば破格の一言。

だが、それでは足りない。

力を求める内なる声が、聞こえるような気がした。

「兄貴？」

「……ランスか」

無心になろうと振るっていた剣を止めて声かけてきた弟の方へと視線を向ける。

だいぶ原作イメージに近づいてきた彼は少し心配そうな視線でこちらのことを見ている。

その視線に対してバールは答えるすべを持たなかった。

何せその視線にこめられた心配は的中している。

それが早いか遅いかの違いだけ。

基礎学校に通わせて貰っていることに対して村長への感謝の念はあれど、この心の内に秘めた熱情も、とどまることを知らなかった。

「I need more power. 飲まれるつもりはなかったんだな」

「兄貴。何を言ってる？」

「お前には関係ない話さランス。何を求め、何を願うのか、未だ定まっていないうお前にはな」

「……俺を馬鹿にしているのか？」

「いや、そんなつもりはない。お前にもいずれ分かる」

そういうとバージルは二人に与えられた部屋へと戻ろうときびすを返した。

そんな彼に慥然とした態度を見せながら、ランスもついてくる。

ブラコンというわけではないが、ランスはランス。自身の身内と見なしたモノに対してはどこまでも甘い男だ。その片鱗は昔から有ったというわけだ。男だから、女だからとで区別していないこの年頃にあつてはなお。

そんな彼を横目で見据えて、バージルはランスに向かって語りかけた。

「自らの魂の魄動に逆らうことは出来はしない。その自覚が少しばかり俺は早かった。只それだけのこと。だとするなら……ランス、お前は どうしたい？ お前の魂はどう叫んでいる？」

「はあ？ 何を言ってるんだよ、兄貴。頭でも打ったのか？ 本当におかしいぞ」

「狂っているのは当然だ。この魂ががなりたて、この身をせかして焼き尽くそうとする。だからこそ、俺に選択肢はなかった。そして、それでいいと思っている」

「兄貴？」

「ランス。お前の魂は何を望み、何を願う？」

そう言うのとバージルはその腰に備え付けていた木刀をランスに向けて突きつけた。突然のことにランスは戸惑うばかり。

そんな彼の様子を見て、バージルはただ苦笑を浮かべて、その腰に木刀を差し直した。

「それが分かったあとに、また会おう」

「お、おい待てよ、兄さん。どこへ………？」

「さてな。とりあえずはこの魂の赴くままに………」

そう言うのとバージルは向かっていった道からそれでその場を立ち去る。

ランスはそんな彼のあと姿を追うことも出来ずに、ただその場に立ち尽くすしか出来なかった。

そして次の日、さらに次の日も戻らないバージルのことをランスは心のしこりとして胸に残し、それでも日々はたんと過ぎていった。

時にしてG I歴1006年。

未だ、ランスが女を知らず、自らの魂の望みを知らず、ただ無邪気に兄と一緒になら何でも出来ると信じていた、そんな時期だった。

Mission01 力を求めて

ランスと分かれて数年の月日がたった。

未だにバージルの肉体は子供の領域を出ていない。

だが、レベルアップの加護はすさまじい。

こんな子供の状態であっても、雑魚モンスター相手なら一方的に勝てるようにはなっていない。

だからこそ。

「もう少し割のいい依頼は無いのか？ キース」

「ふん。そんな事はもう少しでかくなってから言うんだな」

「チツ……力だけならこのギルドの中でも屈指になったと思っただがな」

「そうかもな。だが、力だけじゃ人からは信頼されないもんさ」

「ガキである事は自覚している。だから文句は言つてないだろうに」

「おう？ さっきの問いかけは文句じゃないと？」

「真実、ただの質問だ」

「そうかい。そうしておくよ」

自身の問いかけに対してあっさりと返されたが、そのことに対してバージルは事実不満を抱いてはいなかった。

何せ今のバージルはロウティーン。

見た目も事実としても子供である事に違いなく。

こんな子供に仕事を回してくれると言うだけでも、目の前の頭の寂しい男には感謝しておかなければならないだろう。

「それで、今回はどんな仕事だ？」

「ブルーペット商会からの依頼で、ポルトガルまでの商品の輸送依頼だ」

「街道を通る分には危険なんぞほとんど無いと思うが？ それこそ輸送はうし車だろう？ だったら何を心配して冒険者なんぞを護衛に雇う？」

「だから言っただろう？ 割のいい仕事だと。GOLDの多寡だけで割の善し悪しを判断するようじゃ、冒険者としてはまだまだ未熟だなバージル」

「余計なお世話だ。俺は別に冒険者として大成したいわけじゃないんでね」

「ほう、なら一体何を目指しているんだ？」

「貴様には以前にも伝えているだろう？」

そう言うとバージルは依頼受領の書類にサインをして、その書類に書かれていた場所

へと向かうため、キースギルドの扉を開ける。

その後ろ姿をキースは眺めながら小さくため息をついた。

そして彼に対する忠告をこぼす。

「何を求めているかわかりにくい冒険者つてのも、存外に扱いにくいもんなんだぜバー
ジル」

「俺の求めているモノなんて、簡潔明快だ」

「簡潔明快ねえ。金でもねえ、女でもねえ、とすれば確かに求めるモノは一つか」

「そうその通り。俺が求めているモノは力だ。I need more power
それ以外に俺の求めているモノはない」

「力……ねえ。そいつに関してはもう十分だと思うがレベルだつて30を越えた
んだらう？」

「だからどうした。俺が憧れ、追い求めている力にはほど遠い。ならば、そこを目指すのは当然だろう」

「使徒なり、魔人にでもなるつもりかよお前」

「それしか手段がないとするならば、あるいは……」

それだけ言つてキースギルドより立ち去るバージル。

後に残されたのはバージルの鬼気に触れて冷や汗を流すキースだけだ。

「は……十五に届かないガキがああまでの氣勢を見せるかよ」

そのあり方は凄絶だ。

そのあり方は凄惨だ。

そのあり方は、だが同時に悲哀さえ感じさせる。

彼が抱く力への渴望は、もはや強迫観念にもほど近い。

それほどのモノを求めて求めて、求め続けた先にどうなるのかをキースという男はよ

く知っていた。

とはいえそれで、バージルに対してどうこう言うつもりはキースにはなかった。

彼にとってのバージルとは、将来有望な冒険者のひとりでしかなく、いずれ早死にするだろう生き急いだ子供でしかないのだから。

少なくとも、今はまだ。

街道をひた走るうし車でバージルは瞑想していた。

魔力を高めるための鍛錬で有り、同時に魔力のコントロール能力を鍛えるためのモノでもある。

バージルがバージルたらしめていたモノ。

スタイリッシュな戦闘スタイル。

それをモノにするため、まずは基礎能力を鍛えている最中だった。

魔力を高めコントロール能力を極める事で魔力による身体能力の強化能力の向上、そして第一目標としてまずは幻影剣を扱えるようにすることをおいている。

しかし、これがなかなか難しい。

身体能力の強化はバフをかける魔法の術式を皮膚の内側に魔力を持って刻み込む事で、魔力を流すだけで発動できるようにしてクリアした。

幻影剣もダメージを与える通常の幻影剣は無属性の魔法の矢を剣状にする事で、貫通力を増したモノとして既に運用できている。

急襲幻影剣、円陣幻影剣は既に形になっている。幻影剣自体を薄く、鋭く、それでいて魔力密度を強める事で強度を担保する事で、既に並の剣を投擲したり振るうよりも威力が出るようになり、これである程度の完成としたのだ。

しかしながら、未だに幻影剣を起点とした瞬間移動じみた高速移動や烈風幻影剣のように真上に吹き飛ばす術式、五月雨幻影剣のように相手の動きを止める術式などは完成していない。

烈風幻影剣は対象の周囲に幻影剣を配置するだけであるし、五月雨幻影剣もただ上空から無数の幻影剣を降らせるだけ。

幻影剣一つとってもこの程度。

目指す目標の偉大さに瞑想しているのにめまいが起きそうになる。
それでも。

「I need more power」

魂から漏れ出た言葉を呟きつつ目を開く。

バージルの瞳はうし車の屋根上からの風景は行く先にて待ち構えている盗賊の姿を既にとらえていた。

距離にして数百メートル。

魔力のコントロールに熟達していくにつれて、生き物が潜在的に持つ魔力を遠くからでも感じる事が出来るようになり、目をつぶった状態でもある程度どこに何がいるかを把握できる。そして、その生き物が抱く感情もまた同じく。

うし車の前に男達が展開する。

そして、リーダー格らしい男が下卑た目で止まろうとしたうし車に向かって声をかけようとして……………

「おっと、(ハハ)……………」

「跪け」

脅迫の言葉を最後まで続ける事さえ出来ずに、降り注ぐ幻影の剣が周囲に展開してい

た男達ごと盗賊のリーダー格を刺し殺した。

「え？」

一瞬で引き起こされた地獄絵図。

目の前の光景はいつそ現実感がなく、残った男達の意識は一瞬の空白に支配された。その隙を逃してやるほど、バージルは優しくはない。

背に負っていた魔力で作り上げた大剣、ミラージュエッジ。

それを握り、うし車の屋根より飛び降りながら魔力によって重力を強めて落下斬る。

ヘルムブレイカー
兜割り。

そう呼ばれる魔性の一撃は、蒼い魔力剣の切れ味も相まって、頭の天頂より股下まで一直線に割断。そのまま縦に泣き別れさせて見せた。

残る敵の数は7。

それを横目で確認すると、振り下ろしたミラージュエッジをそのままに投擲。

一瞬で4人の首をはね飛ばす。

その光景を見て残った盗賊達はようやく自身の置かれた状況に理解が及んだらしい。慌てて逃げだそうとバージルに背を向けた。

「愚かな」

そんな盗賊達に向かって挑発の台詞を吐きつつ、戻ってきたミラージュエッジを用いて剣風を放つ。

その剣風は衝撃波となり魔力を纏って刃と化し、無防備な背中をさらした男達を全て袈裟斬りに切裂いた。

バージル、そしてダンテも扱うドライブと呼ばれる魔技だ。

本来は剣風だけで衝撃波を生み、魔力を纏わせる事も無く刃として機能するのだが、現在のバージルの力量ではそこまでは至っておらず、魔力を纏わせる事で無理矢理に再現しただけの模倣技でしかない。

必殺技ではないただの技の一つをとってしても、本物との明らかな違いが浮き彫りになる。

そのことがバージルに不満を抱かせる。

まだまだ、全く届いていない自分自身に。そして同時に遙か彼方にある憧憬がさらに深くなっていく。

故にこぼれた言葉は本物だ。

「そうだ I need more power」

心からの渴望を口にしながらミラージュエツジを背中に負い直す。

そして、音もなく跳躍して再びうし車の屋根上へと着地すると、再びその場に座り瞑想の体勢に入った。

バージルが瞑想の体勢に入ったあと暫くして、うし車はゆっくりと動き出した。

うし車の御者がようやく状況を理解したのだ。

まあ、突然男達が道に飛び出してきたのを轢かないように止めようとした瞬間、その男達が皆殺しにされれば驚きで状況理解が遅れても仕方が無い。バージルが再び屋根上に飛び乗ったときによくやく盗賊達に襲われている事に理解が及び、バージルが瞑想を始めた頃に襲撃してきた者達の全滅に驚愕しつつも理解が及んだわけだ。

なにはともあれ雇った冒険者の活躍で、無事に旅が続けられる。

そのことに安堵のため息をつきながらうし車は一路ポルトガルへと向かう。

その間に襲われる事は特になく無事にポルトガルへと到着し、バージルはキースギル

ド寄りの依頼を達成した。

筋としては一度アイスの街に戻りキースギルドに報告するべきである。

だが、わざわざポルトガルにまで来て、そのままキースギルドに戻るというのも少しばかり味気ない。

無論バージル自身がポルトガルを観光したいというような事を考えているわけではなく、彼が考えているのはポルトガルから延びる橋、天満橋。そしてその先にあるJAPANの地の事だった。

「閻魔刀の代わりになるモノがあればいいが……」

無論バージル自身もそこまでの高望みをしているわけではない。

そもそも閻魔刀からしてDMCシリーズ最高峰の魔具にして、作中屈指の名刀である。

それに並ぶようなモノがたやすく手に入るなど期待できるようなモノではない。

特に人と魔を別つ剣。

その特性を持った刀など、ルドラサウム大陸全土を探してもあるかどうか怪しい。

とはいえ、バージルに憧れた以上その刀を求めるのは当然だ。少なくとも代替品は必

要になる。

その代替品出来れば、名刀、妖刀辺りを入手したいところでは有った。

「まあ、それすらも望みすぎか」

ともかく、せっかくJAPAN付近にたどり着いたのだからと、バージルは天満橋へと足を向けた。

目的はJAPANにあるだろう名刀、あるいは妖刀。

それを探すためにJAPANに滞在する事をバージルは決め、脳内で手持ちのGOLDに思いをはせる。現状のバージルはレベルが多少高いだけの人間の子供だ。滞在費について考えるのはある種当然だった。

Mission 02 未だ定まらぬ運命の前日譚

天満橋よりJAPANへと渡ったバージルは各地に眠るダンジョンを探索していた。しかしながら彼の求めるようなものはなかなか手に入ることはない。

いわゆる普通の刀などはすぐに手に入ったが、それらはバージルの求めている刀の水準には届いていなかった。

折れず曲がらずの日本刀。

その中でも名刀、妖刀と呼ばれる類の武器はなかなか手に入らないということだろうか。

すでにこの冒険が長くなることを悟ったバージルは、キースギルドへ手紙を送ってあった。

その内容としては先の依頼料を含めたキースギルドに預けてある金品のランスへの譲渡、そしてしばしJAPANにとどまること。また、この冒険の後もアイスの街に戻るつもりはない故の後始末の依頼だ。

その手紙を飛脚便に渡すことで晴れてバージルは根無し草。

戻る場所も、義務もなくなったことでその日暮らしの冒険三昧が続いている。

そんな生活を続けて、約二年。

JAPAN西半分のダンジョンの大半は潜ったが、目当ての武器は手に入らず。なかなかどうして、自分はランスとは違い冒険の才能、あるいは幸運には恵まれていないらしいと自嘲する。

そんなバージルに対して皿が差し出された。

差し出した相手を見てみれば、緑色にピンクの花柄の着物を着た茶髪の女性がそこにいた。

どうやら休憩していた茶屋の店員らしい。

店員にしては随分と態度が大きく、そのうえで美人が過ぎるが。なぜか、バージルが抱いた感情は美人に抱くそれとは違うどこかで会ったことがあるような既視感だった。

「お団子。お食べなさいな」

「……注文しちゃいけないはずだが？」

「それでもよ。それも陰鬱な顔して店前の長椅子に座られてたんじゃ、こつちの商売も上がったりつてところ。それ食べて、おねー様に悩みでも話してごらんさい。あなた美少年だから、聞いてあげる」

その言い草に苦笑する。

自身の容姿がバージルの幼いころのものである以上、イケメンであることは承知の上だったが、女性のほうからこうもあけすけに言われるとは思ってもいなかった。

「ありがたくいただくよう」

「そーそー。素直が一番よー若人君。それで？ 難しい顔して何を悩んでいたの？」

その言葉に団子を口に含んだバージルは言葉を返さず、腰に差した刀を抜き放つことで答えとした。

引き抜かれた刀はそれなりの名刀である。いや、正確には名刀だったというべきか。引き抜かれた刀は全体にひびが入り、すでに刀としての用途をなせるようには見えな
い。

「うわ、ナニコレ。どういう使い方したらこんな風になるのよ？」

「俺自身は普通に使っているんだがな。抜刀の際の圧に刀自体がついてこない。……別
段手入れをさぼってるわけではないんだが……」

「そうよねえ。なるほどなるほど。並みの刀じゃ使いつぶされちゃうってわけね。むむむ……これは難問」

「だろうな。JAPANの西半分は大方探しくしたつもりだが、結局耐えられる刀はなかった」

「ふうん？　ちよつと待ちなさい。カズー!!　ちよつと来てカズー!!」

言いながら彼女は茶屋の奥へと誰かを呼びながら引つ込んだ。

それを見送りながら、バージルは団子を口に運ぶ。

いや、先ほどから思っていたが絶品である。

本当に美味しい。

バージルに憧れて、その姿を目指しているとはいえ、別段美食が嫌いというわけではないが、この団子はまた食べたいと思わせるほどに美味しい。

「えつとどうしたのかな？　俺が作った団子に何か問題でもあったのかい？」

「そういうわけじゃないんだけどさ、その美少年が困ってたから何か助けてあげたいと思って。ほらカズ、何かいい案出さないよ」

ワイワイとにぎやかに茶屋より二人が出てきた。

片方の男はカズと呼ばれている青年。もう一人は先ほどの女性だ。そして片方の男にもバージルは見覚えがあった。もう少し正確に言うのであれば、彼の面影を知っているというべきか。

「織田の……?」

「あ、俺のことを知っているんだね。そうだよ。織田信長。一応、この国の国主だね」

「その国主様がこんなところでお団子屋とは……当代の信長殿は随分と暢気なんだな」

「うーん。暢気かどうかはどうなんだろうね。確かに去るもの拒まずの精神で国を運営しようとは思っているけど」

「あら、こいつの暢気さを一目で見抜くとはやるじゃない。この私を妻とした三国一の果報者にもかかわらず、自分で版図を狭めようとしてる変わり種。それがうちの旦那

よ

そう言つてえへんと胸を張る女性。

その言葉でバージルの疑念は確信に至つた。

なるほど、この女性が帰蝶らしい。

ならば抱いた既視感にも納得だ。この女性ランスに似ている。もちろん男女の違いといった細部には違いがあるが、奔放で異性好きで、なにものにも縛られぬ自由な雰囲気はランスがまとう空気に近い。

彼女の様子に、バージルは肩をすくめて見せる。

それはランスという少年に振り回された時によく見せていたしぐさだ。

同時にその仕草は信長が帰蝶に振り回されていた時に彼女へと良く見せていたしぐさに近く、それを見た彼女は不満げに唇を尖らせた。

いつも信長に浮かべられている表情をバージルを浮かべたのが気に食わなかったらしい、手に持った盆でバージルの頭をはたこうとしたが、それをバージルはあっさりときけた。

「む、よけるな」

「好んで痛い目にあいたがるような奇特な趣味はしていない」

「この私自らの折檻なんて、うちの国の人間なら泣いて喜ぶつてのに変なやつね」

「変なのはむしろ貴様だろうに」

「失敬な。というか不敬であるぞ？　大名の奥方を貴様呼ばわりとは。やっておしまいなさいカズ」

「えー。そこで俺を頼るのかい帰蝶？」

「か弱い奥さんを守るのは旦那の務めでしょう？　ほら、はやくはやく」

「いや、むしろか弱いのは俺のほうなんだけど……」

「かつちーん。はーん。そういうこと言うんだカズ。これはお仕置が必要ね。今晚は

寝かせないんだから」

「……ははは、まいったなあ」

「……惚気を見せられるために、お前は自分の婿を呼びつけたのか？」

「おつとそうだった。そんなことよりもカズ。この子に見合いそうな名刀のありかを教えてあげなさい」

「ん？ 名刀のありか？」

「そう。どうにもこの子、劍の腕前がありすぎて刀が腕前についてこられてないみたい。この織田の国主なんだから、そういう武器財宝にも詳しいでしょう？」

そんな風に言った帰蝶に対して信長は苦笑しながら頬を搔いた。

妻に頼られるのは嬉しいが、生憎信長にそう言った方面の知識はなかった。

だが、そういうのに詳しい男……妖怪は知っている。

「梵天丸への手紙を書こう。彼なら名刀だけでなく、妖刀のありかにも明るいだらうからね」

「梵天丸……当代の妖怪王か」

「詳しいね。つい最近代替わりしたばかりなのに」

「情報はいつ、いかなる時も武器だ。その収集を怠ることなど俺にはできん」

「なるほど。それはとてもいい心がけだ。……それでどうするのかな？ 紹介状ならしばらく待つてくれたらすぐに書くけど……」

その言葉にバージルは少しばかり考え込んだ。

妖怪王……すなわち伊達政宗。

その実力は妖怪王に恥じぬできる男。彼と顔をつないでおくのも悪くはない。

一方でこの辺り、尾張地方に腰を据えるというのも悪くはない選択肢だ。

凋落以前の織田家のトップと顔をつないでおけるといなのはJAPAN各地を動き回ることとつてもないメリットであるし、そもそもバージルは刀の入手を急いではいなかった。

名刀、妖刀は確かに喉から手が出るほどに欲しいが、迷宮探索によって上がるレベルの向上も副産物としては十分である。JAPANの東半分を探索してから政宗を頼ったとしても遅くはないだろう。

何より。

「なにになに？ この私に惚れた？ イケメン美少年を惚れさせるなんて、罪な私。でも私人妻なの、私との思い出は一夜限りの危ない思い出として口に出さないなら、お相手してあげてもいいけど？」

「人妻に手を出すほど、女に苦勞しちやいない」

「それはそれで相手にされてない感じで腹が立つわね。じゃあどうして私のことを見つめたのよ？」

「少し思うところがあっただけだ」

原作開始前に目の前女性は死ぬ。

そのことをバージルは知っている。

ランスシリーズ七作目戦国ランスに、目の前の女性は登場することなく、故人として回想で語られるしかなかったのだから。

しかし今は生きている。

その歴史の流れを変えられるかはわからない。だが……

「しばらく、尾張に滞在する。時折団子を食いに來るから、その時にでも妖怪王への紹介状を頼む」

「と言うことは奥州へはしばらく後で、かい？」

「ああ。このあたりの迷宮に関してはまだ探索してないからな。それらがひと段落したところで奥州へ向かっても遅くはないだろう。刀はあくまでサブのプラン。メインは俺が強くなることだからな」

そういうとバージルは残っていた団子を口の中に放り込んだ。

バージルに憧れる気持ちは決して弱まっているわけではない。

むしろ年月を経るたびにその思いはますます強くなっていく。

だが、同時にこのルドラサウム大陸に生まれ落ちた意味だつて見つけたくはあつた。

そしてその意味が救えなかつたものを救うということであるのなら、ランスシリーズ
のファンだつたものとしてこれ以上に嬉しいこともまたないと思う。

無論救えるかどうかなんてわからない。

このルドラサウム大陸の運命は存外強固に定まっている。いい加減なように見えて
精緻に作りこまれたこの世界では、自分一人の足掻きなどたかが知れているだろう。

それでも。

「ん？ どうしたのかしら。やっぱりおねーさんに惚れた？」

「いや、団子のお代わりを頼む」

強くなる以外に。

あるいはどうして強くなるのか。その理由として、この世界で起きる悲劇をできる限り小さくできるのであれば、この世界に生まれた意味としては悪くない。

バージルはそう思つて小さく笑みを浮かべた。

I need more power

魂が訴えるその願い。その渴望。その向ける先が、運命の改変であるというのなら、それも悪くはない。

なぜなら、この身はバージルだ。

少なくとも、そうあらんとする身であるなら。

神の定めた運命というやつは、自身の敵として適任である。

なぜなら。

「いずれ見るがいい……神をも越える力を……か」

小さくつぶやかれたその言葉は、誰に届くでもなく春の陽気の中にほどけて消えた。

Mission 03 胡蝶救いて、嵐に向かわんや

バージルは未だに人間である。

いずれ人を辞める覚悟がないわけではないが、それでもただの人である。

とはいえ、その光景はそれを疑わせるには十分な光景だった。

「ふん!!」

言葉と同時にミラーージュエッジをもって敵の中心部に突撃する。

ステインガー。

魔力を推進力に変化させて、滑るように剣を突き立てる魔技は違うことなくアカメを貫いて絶命させた。

そして驚愕の念に動きを止めていたヤンキーに向かってそのまま剣を振るうことのできたき切ると、問題の相手ブラックハニーがそこにはいた。

舌打ちを一つ。

ミラージュエッジを背に負いなおし、鞆の一撃でブラックハニーの花火を受け止める。そのまま鞆先でブラックハニーを打ち据えることで彼我の距離をとって居合の態勢に移行、抜刀する。

抜き放たれた一撃は陶器でできたハニーを割ることなく切り飛ばして絶命させるが、バージルがいるのはダンジョン内。

いくらでも敵となるモンスターは存在していた。

迫るモンスターたち。

一拍の空白を得るために円陣幻影剣を生み出し、モンスターたちを怯ませる。

その空白を作り出して用なしとなった円陣幻影剣を急襲幻影剣へと変化させ、そのまままこちらを狙っていたロンメルに向かって叩き込む。

血を吹いて倒れるロンメル。

その周辺に集まっていたモンスターたちへ追撃するように、五月雨幻影剣で串刺しにする。

しかし。

「チッ」

生き残ったハニーたちを見据えて再び舌打ちが漏れた。

現在のバージルにとってハニーは天敵となっている。

魔法を完全に無効化するというその特性上、幻影剣は通じず、ミラージュエツジもかき消されてしまう。

そうある以上、戦う手段としてとれるのが刀を用いる近接戦闘術。あるいはベオウルフ使用時のバージルをモデルにした格闘戦闘術の二つとなるのだが。

「刀が手に入っておらず、拳戦闘術もこれではな

鍛えていないわけではない。

刀にしたってそれなりの名刀、妖刀は手に入っている。しかしながらそれらではバージルの求めるラインには程遠い。

拳戦闘術用の装備も物足りない。

スパルタという職業がある以上拳を使った戦闘術、そのための装備は無いわけではない。

しかしこちらもまた、バージルが求める武器の性能としては物足りない。

まともに振るうだけで耐えきれないというのではさすがに困るのだ。とはいえ……

「当てがないわけではない分マシではあるか」

五月雨幻影剣を生き残ったハニーどもをその拳で砕き、刀で切り飛ばしながらバージルはほつりとつぶやいた。

「おめでとうございます。これでバージルさんのレベルは87となりました」

「ああ」

JAPANにも存在しているレベル屋にてため込んだ経験値をレベルに変える。その作業をしていると、興味があるときいてきていた帰蝶の視線が信じがたいものを見るようなものに変わっていた。

「なんだ？」

「信じられない。あんたって、まだ元服前でしょ？」

「一応今年で元服だな」

「元服前でそのレベルって……あんた将来何になるつもりなのよ？」

「何になる……か。さて、そのあたりのことを定めてはいない。だが、目標はある」

「目標？」

「あるいは憧れか。今の俺はその憧れには程遠い。だからこそ、その憧れに近づけるように歩むのだ」

断固たるバージルの言葉に帰蝶は何も言えなかった。

どこか遠くを見つめるバージルの視線に揺るぎ無く、声をかけることさえ躊躇わせる力があつたからかもしれない。

とはいえ、弟のように接してきた少年の見せる大人びた姿に、あるいは凄絶な覚悟に

帰蝶は息を呑んだ。

「梵天丸に会うのもその一環？」

「ああ。そろそろ、このあたりのダンジョンも潜りつくした。次の手として妖怪王に会わせてもらえるというのなら、俺としても否はない」

「あなたが来て一年。意外とあつという間だったわね」

「物理的な収穫は少なかったが、力は得た。これで良しとするさ」

「私のような美人とも出会えたしねえ？」

「……ふん」

「鼻で笑うな。ぶん殴るわよ？」

くだらないことを言い合いながら二人は一路信長が経営している店へと向かう。バージルは存外に気に入った団子を食べるため、そして同時に梵天丸への紹介状を受け取るために。

そう時間もたたず、茶屋に到着する。

すると同時に、バージルは腰の獲物に手をかけた。

「バージル？」

帰蝶の疑問気な言葉を置き去りにして、信長に向かって幻影剣を一本飛ばす。

ざくりと音を立てて彼を襲おうとしていた忍びの背に幻影剣が突き刺さった。

突き刺さった幻影剣をアンカーとして瞬間移動じみた高速移動。

それを用いて忍びの背後に迫ると、そのまま抜き放った刀をもって問いかけた。

「いったいどこの手のものだ？」

「不覚。だが、忍の本懐果たすまで……」

言葉と同時に忍はこと切れる。

バージルがその首を飛ばしたのだ。

返す刀で円陣幻影剣を発動、屍を空中へと跳ね上げた直後に死体が爆発した。粉々になった血肉が周囲に降り注ぐ。

「……忍びとしては満点だが、茶屋の客としては最悪の部類だな」

「バージル!？」

「ケガはないか信長。だから忍びの護衛をつけろとあれほど言ったんだ」

「あ、ああ。助かったよありがとう」

「礼はいい。茶屋は汚してしまったからな」

その言葉に信長は苦笑した。

一国の国主を命の危機より救っておいてこの態度。

本来ならもっと謝礼を求めるような態度をとってもいいのだろうが、バージルは決し

てそんな態度を取りはしなかった。

それは彼自身の抱く美意識がなさせる行動だろう。別段、自分たちに興味が無いわけではないということが理解できる程度には、信長たちはバージルと接してきた。

バージルが他者に向ける熱は確かに少ない。

しかしそれは自らの内に向ける熱があまりにも膨大であるが故のことであり、決して熱がないというわけではないのだ。

「それよりも信長」

「ああ、梵天丸への手紙だね。すぐに用意するよ」

「感謝する」

「それはこっちのセリフさ。命を救ってくれてありがとうバージル。君のおかげでどうにかこうにか国主を続けていくことができそうだよ」

「ふん。その感謝をするぐらいならもう少し身の回りの警護には気を払うんだな。例え

自ら力を縮小しようとも、狙うやつは狙ってくる。理解できただろうか？」

「ああ。身に染みてね」

信長は苦笑しながらそう返した。

彼自身、自分の先行きがそれほど長くないことを自覚している。

自覚したうえでこの先のことを考えて国力を少しづつ減らし、各大名たちの独立も認めてきたことから、それほど恨みを買っていないと踏んでいたのだが、どうやら独りよがりな言い分だったらしい。

自身を暗殺しようとする勢力を、こうもまざまざと見せつけられると忸怩たる気分になる。

「何をぼさつとしているのカズ。さつきと片付けるわよ。客が待っているんだから」

そんな彼に向かって帰蝶が声をかけた。

いつも通りの声音で、いつも通りに。

その声音は、いつもの彼女と全く同じそれで、だからこそ信長は彼女に向かって礼を

言った。

「ありがとう帰蝶。君のおかげで俺はいつも救われている」

「ふん。私様が助けてあげるのはあなたただけなんだから十二分に感謝しなさいよ」

「ああ」

時にしてG I 歴1013年。

正史であればこの時に帰蝶は死亡する。

だがしかし、今回は死ななかつた。

そのことが、此度の歴史にどう作用するかはわからない。

あるいは、何も変わらないのかもしれない。

蝶の羽ばたき程度では大きな嵐を迎え撃つことはできない。

だが、時に蝶の羽ばたきが竜巻を引き起こすことだつてある。

そのことをバージルは知っていた。

だからこそ、彼女を救つたのだ。

それは彼女が引き起こす羽ばたきを期待してではない。

いずれ出会うであろう、弟との化学反応を見てみたいがために。

あるいは、蝶の羽ばたきは竜巻と出会ってその竜巻をさらに大きなものへと変化させるかもしれない。その希望をもって。

バージルは未だ人だ。

いずれそうではなくなるかもしれない、少なくとも今は。

ならば、人のために行動するというのも悪くはないだろうと考えている。

それが誰に理解されない類のものだとしても。

だが、そのためには

「I need more powerか」

力を。

もつと力をと、魂ががなり立てて、急ぎ立てる。

確かに力をつけてきている。

このJAPANという地にてようやく幻影剣は満足のいく出来へと仕上がった。

魔法技術だけではなく、忍術をも組み込むことで円陣幻影剣はあてた相手を真上に吹

き飛ばす能力を獲得したし、影縫いの応用により五月雨幻影剣は敵の動きを封じる能力を得ることができた。

一歩ずつ確実に憧れの姿に近づいている。

その実感はあれど、まだまだ足りないという魂の叫びが彼の歩みを止めさせはしなかった。

「バージル」

「もう書けたのか。随分と早いな」

「ははは。実をいうとかなり前から用意自体はしてあったんだ。君は一所にとどまるよ
うな性格じゃないと思っていたからね」

「ふ……長居し過ぎて迷惑をかけたか？」

「まさか。命まで救われてそんなことを思うほど俺は情のない人間じゃないよ」

互いに軽口をたたきあいながらバージルは信長より手紙を受け取る。

そして、これ以上この場所に残る意味はないといわんばかりに、あっさりと茶屋に背を向けた。

「バージル」

「最後に一つだけ、告げておこう織田信長。これより先、嵐が来るだろう。JAPAN全土を巻き込む大きな嵐が。その時に俺とお前は再び出会う。その時まで壮健で……いや」

言いかけた言葉を切ってバージルは少し悩む。

そのらしくない様子に信長は首をかしげながらも、彼の別れの言葉を待った。

「意識を保て織田信長。そのための胡蝶はそばにある。お前にとってはそれで十分だろうからな」

そういうと、バージルは歩き出した。

言葉の意味を信長はよく理解できなかつた。

そもそもバージュルも理解できるように話してはいない。

だが、それで十分だと、これ以上は悟られるがこそ。

だからバージュルはただの一度も振り返ることなく旅立っていった。

向かうべきは妖怪王伊達政宗の住まう地、奥州。

M i s s i o n 0 4 閻魔刀

奥州への旅路は順調といえた。

襲ってくる山賊や野良妖怪はいるものの、レベル80を超えているバージルにとつてしてみれば他愛のない相手だ。それこそ、殺さずに捨て置く程度の余裕を見せることができる程度に力量に差がある。

そもそもからして、移動時に山賊にばったりということはありません。

なぜならバージルの移動手段は修行をかねて幻影剣の射出からそこを起点とした高速移動だ。並みの人間では目で追うことすらできやしない。よってバージルにちよつかいをかけてくるのは、はぐれ妖怪の中でもかなりの腕前を持つものが主となっていた。

そんな相手をして一方的に封殺できているあたり、それなりの力はあると確信出来てはいるが、それでも彼が憧れたバージルという存在にはまだまだ程遠いと感じている。

結局、現状においてバージルが再現できている憧れは幻影剣くらいなのだから、当然

の話ではあった。

「閻魔刀、ベオウルフ、そしてフォースエッジ」

バージルが保有していた三つの魔具。

その再現を今は目指しているが、結局再現が進んでいるのはフォースエッジくらいのものだ。そのフォースエッジとてあくまでDMC5にてミラージュエッジが登場していたからこそ、武器を用いるのではなく魔力でその装備を再現するという方向に舵をとれたから再現が進んでいるだけであって、魔具が必要となる装備の技々の再現はあまり進んでいないのが現状だった。

とはいえ。

「ふん」

鬼の一撃をブロッキングではじき返す。

そしてそのままステインガーで相手を吹き飛ばし、距離の離れた相手に向かってドライブをたたきつける。

直撃した事によつて鬼は真上に吹き飛び、その隙を狙つたトリックアップで頭上を取ると、そのまま兜ヘルム・クレイカー割によつて地面にたたきつける。

再度後方へと吹き飛んだ鬼をミリオンスタブで追撃。数十発の突きの連打は鬼の体積そのものを削り取り、フィニッシュの一撃で粉々に砕いた。

「つもらん」

「凄まじいものですねあ」

奥州へ向かう途中の関東。

その地で遭遇した鬼とそれを封じようとする陰陽師に遭遇したバールは苦戦していた陰陽師へと手を貸していた。

無論、手を貸す事が目的だったわけではない。

強敵。すなわち鬼と戦つてみたかったが故の助太刀だったが、どうやら下級の鬼。

タフさはあつたがそれだけだ。

タフさだけの相手など、ミラーージュエッジしか使えない今の現状であつても圧倒できる。

そのことを再確認して、それでも他の武器を使えない今の現状に歯がみする。

「助力ありがたく、これより儂は地獄穴の封印作業を行います故、礼に関しましては後ほどとさせていただきますたく」

「礼を求めて鬼を狩ったわけじゃない。別段必要ないが……」

「ははは剛毅なお方だ。とはいえ、此方も北条家のメンツというモノがあります。助けられて何も返せるものがない、と言うわけにはいきませんが故に」

「北条家……陰陽師の統括だったか」

「あくまで組み合い寄り合いどころが大きくなったところですがね。歴史だけは古く、故に恩人をそのまま帰すという事は出来ないのですよ」

そう言いながら、鬼と戦っていた男はかぶっていた笠を脱いで笑って見せた。バールより遙かに年を重ねた男だった。

声の張りからして四十代前後と踏んでいたのだが、どう見ても六十前後。

この年まで鬼と戦い続けていた事は尊敬に値する。

そんな男からの誘いをバージルは無下に断る事が出来なかった。

別段急ぐ旅でもない。それに陰陽師を総括しているもの出とあれば、妖刀のたぐいには詳しいだろうという打算もある。

「分かった。ならば地獄穴の封印をさっさと済ませろ。．．．あるいはそれにも手が必要か？」

「貸していただけるというのであれば、ありがたくお借りしますが」

「最初からそれが目的だったくせに、食えない男だ。．．．もつとも此方に来る助力なんて、魔力の融通程度しかないんだが．．．」

「はは、それで結構でさあ。術式の制御に関してはまだまだ若いもんには負けないと自負しておりますが、肉体の衰えはなかなかどうして、誤魔化せないものです」

「そうか」

簡潔に言葉を終わるとバージルは北条の男の肩に手を置いて魔力をゆつくりと流し込む。

その流し込まれた魔力を自身の魔力と調和させ、喧嘩させずに見事な術式を練り上げる北条の男。

その術式の見事さに、バージルは目を細めてじつくりと観察する。

陰陽術に関する造詣はほとんど無い彼をして見事としか言いようのない美しい術式。その術式だけで目の前の男の力量が測れるというもの。

即ち。

「北条家の当代早雲とは……全く、鬼への手助けすら無用だったか？」

「かか。間違はなく助かりやしたぜ異人殿。あの鬼、儂だけでは苦戦は免れぬ程度には強大な力を持っておりました故に、貴行の手助けはまさに天佑といったものでした」

「ふん。魔力まで持っていていったんだから、相応の礼は期待させて貰うぞ」

「ええ、そいつは何とかいたしましょうや」

その言葉を受けてバージルは北条の館にやつかいとなった。

そして数日の時がたった。

当代の早雲が、組合への地獄穴封印の報告のため家を暫く留守にする間、バージルは北条の館に留め置かれている。

賓客という待遇ではあったが、彼自身が異人という事も有り、少しばかり見世物にされていく気分となつてあまり気がいいものではなかったが、だからといってその程度で怒るほどバージルの器も小さくはない。

むしろ、この状況を楽しんでいる節があった。

先代早雲の館であるという事は当代早雲。現状であれば次代の早雲がいる事は明白。そのことに気づく事もなくほいほいとついてきた結果として。

「まあ、こうなるか」

「参ります」

バージルは若かりし頃の早雲共に修行を行う事になっていた。

共に修行を行う事になった理由は簡単だ。

バージルは未だに自分が望むべき姿に届いていないが為に、自身の修行を怠る事はなく、一方で次代の早雲、宗瑞も祖父の跡目を継ぐために厳しい修行を課している最中だ。

その二人が出会った以上、修行を共にする事になるのは自然な流れであるといえたかもしれない。

宗瑞を訪ねてきた南条蘭があきれる……あるいは嫉妬してしまうほどに、二人は意気投合し互いに互いの術理を高め合っている。

宗瑞はバージルに陰陽術に関する技を伝えたし、バージルも自身の剣技や魔法について宗瑞に伝えている。

そして修行の最後の仕上げとして二人で組み手を行うのがここ数日の日課となっている。

そして、その組み手を幼い蘭が見届けるのも。

符術により現れた女武士がバールルの前に現れた。

式神だ。

幼くしてこのレベルの式神を宗瑞は数体以上操る。その例に漏れず数は六。彼が操れる限度数を超えている。しかし、今までの修行で成長したと言わんばかりに見事に操りバールルを取り囲むと、連携を持って攻めかかってきた。

そんな一撃を黙って食らってやるほどバールルは優しくはない。

迫る六人の式神の一体に向けて幻影剣を飛ばして瞬間移動。

腰にある刀を持って武士の一撃を弾き返すと、後ろから斬りかかってきていた相手の攻撃を鞘先で打ちのめす事で距離を取り、そのまま居合いの体勢に移行し抜刀。刀で受けようとした式神を、その刀ごと両断して見せた。

「流石は」

「連携がまだまだ遅い。これでは各個撃破と同じだ」

宗瑞へのアドバイスを送りながら納刀、同時に抜刀。放つのは次元斬。と言いたいが

実際には魔力と抜刀術で誤魔化した偽物だ。とはいえ切れ味は本物で、三度放ち三体の式神を無に帰す。

「くっ!？」

「予想外に応じろ。戦場は常に予想外で満ちている」

疾走居合い。

バージルが得意とした閻魔刀を用いた神速の一撃。

形になっていないため複数の斬撃が発生する事はないが、それでも残る一体の式神を斬り飛ばすには十分で、切り抜けながら宗瑞の目の前に立った。

「チェックメイトだ」

「……………ええ、手も足も出ませんでしたね」

「流石に元服前の子供に負けるほど、ぬるい鍛練を重ねてきたわけじゃない」

「それでももう少し勝負になるとは思っていたんですけどね」

「少しは対応できてきている。それだけでも十分な進歩だろうに。それともあれか？
かっこつけたい理由でもあったか？」

バージルのからかうような台詞に宗瑞は顔を一瞬朱色に染めた。

だが即座に平静を取り戻すと、肩をすくめる事で降参の意を示した。

これ以上触れられたくない部分らしい。だとするなら、そのことに触れない程度には
バージルも宗瑞の事を気に入っていた。だが、見過ごせない事もまたある。だからこ
そ、アドバイスを送る。それがきつと宗瑞に理解できなくとも。

「大事なら目を離すなよ次代の早雲」

「え？」

「間に合わせているつもりだが、お前が目を光らせていけばまず問題ないだろうからな」

「えっと………一体どういう意味ですか？ バージル」

「分からないままであつた方が幸せな事だ」

そう言うとバージルは武器を直して屋敷の方へと歩き去って行く。
そんな彼を見送る宗瑞に向かって蘭がととと近づいていった。

「バージル殿」

「早雲殿か。報告にはしては随分かかったな」

「報告自体はすぐ終わったのだがな、なにぶん頭の硬い奴らが多くての。納得させるのに時間がかかってしもうたのじゃよ」

そう言つて呵々と笑う早雲は一振りの刀をバージルに向けて投げ渡した。
受け取っただけで分かる。妖刀だ。

「(いつは……)」

手になじんだ。

まるで何年も前から使い込んできたような感触。小さく金属音を立てて鞘から刃を引き抜けば、見事な刀身がバージルの顔を映し出した。

「持っていた鬼に曰く、地獄の閻魔が作らせた刀らしい。が何をどう間違えたか人が扱おうサイズの刀になってな。宝物庫に死蔵されていたのをとある鬼が盗み出して地上にもたらされた妖刀だ。名前は……」

「閻魔刀」

「ぬ？ 知っていたのか？」

「いや、何となく分かる。これを俺に？」

「ああ、その通りだ。此方は陰陽師。刀の扱いに関しては専門外もいいところ。死蔵しておくならあんたのような腕利きに託す方が何倍もましつてもんだらう?」

「恩に着る」

「おう、着てくれ。んでまたどつかでその恩を返してくれりゃいい。そうだな、あるいは次代辺りにな」

その言葉にバージルは苦笑しながら閻魔刀を腰から下げた。

随分としつくりくる、二本目のメインウェポン。喜色見せるバージルに対して早雲は一つだけ忠告を送った。

「気をつけろよバージル殿。その刀は人の穢れを分かつ剣だ。自身が穢れに飲まれたとき。どうなるか分からないからな」

そのことにバージルは微笑を浮かべる事で回答とした。

Mission 05 返礼にて相食む

闇魔刀を手に入れたからと言って、バージルが奥州へ向かう必要がなくなったという訳ではない。

手紙、紹介状を書いて貰ったという義理を果たすためにも、あるいは未だ手に入っていないベオウルフの代わりとなる武具を求めるといった意味合いでも奥州に向かう意味はあった。

そのことを北条に告げてその館を辞して既に二日。

驚異的と言っても過言ではない速度でバージルは奥州へと到達しようとしていた。

気配が違う、敵意が違う。

なるほど妖怪の国。

それを理解して尚、悠々とバージルは踏みいると数体の妖怪がバージルの目の前を遮るように現れた。

事実、自分を遮っているのだろう。

全員が敵意をむき出しにしてバージルをにらみつけている。

無論その程度で怯む類いの男ではない。

懇切丁寧に説明すべきか、それとも説明を放り投げて剣を抜くべきか少しだけ迷う。

もとより相手は妖怪だ。滅ぼしたところですぐに蘇る。手加減してやる義理はない。無いのだが……

「妖怪王に会いに来た。書状もある。通してもらえるか？」

「妖怪王様に？」

切り込む手段を執る事無く、バージルは懐より手紙を取り出して目の前の妖怪へと渡した。

信長より預かった書状だ。

それを営めるように確認すると、妖怪は丁寧に折りたたみバージルへと返してきた。

「王の下へと案内させていただく」

「そいつは都合がいい。嘘はないな？」

「王の恩人たる織田家よりの書状だ。それを無下に出来るほど、俺は偉くはない」

「そうか。その言葉信じるのでしょうか」

「ただし、かなりの距離がある。ついてこれるかどうかは保証しないぞ？」

「ふん。誰にものを言っている」

その言葉と同時に話していた妖怪の姿がかき消えた。

同時にバージルの姿もかき消える。

凄まじい俊足を飛ばしてかけたのを、バージルが追った形だ。

並の人間では、あるいは忍びの類いであっても追いつけないだろう俊足を飛ばして妖怪。天狗は森の中を駆け抜ける。

しかしバージルは悠然とその速度について行っていた。

幻影剣を用いたトリックアップ。

それを連打する事で瞬間移動じみた速力を維持している。

その速度に天狗の男は内心舌を巻いた。

ついてこられるはずがないと高をくくっていた訳だが、こうも容易くついてこられると、それはそれで天狗としてのプライドに触る。

そのプライドを守るためにさらに速度を上げようとした瞬間、幻影剣が真横の木に突き刺さり、そこへバージルが現れた。それに対して驚愕の視線を向ける天狗。その視線に応じるようにバージルはため息をついた。

「案内すると言いながら置いていこうとするな、たわけ」

「む……これは、申し訳ない」

「気をつけて欲しいものだな」

気を取り直して、木の上を二人はかける。速度を上げても悠々とついてくるバージルに対して、天狗は彼が並の人間であるという認識を改めた。

しかし、この場所から妖怪王が居城としている場所までかなりある。

ついてこれるかと言わんばかりに天狗は僅かに速度を上げて、それにバージルも悠然

と着いていった。

以降およそ二日、不眠不休で走り抜けた。天狗はちらりと横の人間を確認するが、疲れた様子を見せる事無く、黙々と天狗のあとをついてきている。

それを見て天狗は内心舌を巻く。

ここまでついてこれるとは、本当に人の類いか怪しくなってくるが、彼より感じる気配は人間のそれだった。そして何より。

「あそこか」

「ああ」

「ならば、案内はここまででいい」

「良いのか？」

「ふん、既に気づいて殺気を飛ばしてきているのがいる事か？」

「気がついているのであればなおさら、俺が説明をするが?」

「認められぬと言うのであれば、認めさせてやるのも一興だ」

そう言つて、バージルは悠然と笑みを浮かべた。

強いものとの戦いを歓迎する修羅の笑み。

その笑みを見て、案内してきていた天狗は小さく冷や汗をこぼした。

この表情を浮かべる類いの存在を、長く生きている天狗である彼はよく知っている。

あの笑みは、修羅などと呼ばれる類いのものが浮かべる笑みだ。戦いを欲してやまぬ、人で有りながらどこか壊れた存在。

実力があるのはここまでの道案内で理解していたが、こんな類いの男だとは理解していなかった。

「あ、おい」

天狗が慌ててバージルに声をかける。

何も警戒心を見せない悠々とした態度で、当然のように屋敷の目の前に歩いて行つた

からだ。

その姿に向かって黒い影が奔る。

影の放つ一撃は、間違いなくバージルの首を刈り取ろうとして。

「ふん、ずいぶんな挨拶だな。客人相手にこうまでするか？」

「あら、防がれちゃった。だからその質問に答えるけど、濃密な殺気を叩き付けてくるよ
うなのを客人とは言わないとおねーさん思う訳よ」

ぎちぎちと苦無とバージルの背に負われたミラージュエツジがつばぜり合いをして
いる音が周囲に響く。

何をやっているんだあの客人は、と天狗は頭を抱えたが、そんな事は知った事ではな
いと言わんばかりに、バージルは当然のように回答した。

「殺気を飛ばされたからな、返礼だ」

「ああ、なるほど。だから私にだけだったんだねえ」

「ああ。こちらは客人だ。受け取ったものには礼を返さねば、礼を失するというもの」

バージルの言葉に、襲撃者である折女は好戦的な笑みを浮かべた。

彼女に対しての答えとしては満点の回答だったらしい。

もし、政宗と結婚していなければ彼と結婚するのも悪くはないと考えてもおかしくない程度に。

音が響く。

ミラージュエッジをもってバージルが折女の苦無をはじき飛ばした音だ。はじき飛ばした勢いの儘に距離を取った折女に対して、バージルは即座にミラージュエッジを引抜き、そのままステインガーで突っ込む。

その一撃を折女は容易く回避した。

真横に飛ぶように回避して、小手調べと言わんばかりに抜いた四本の手裏剣を投擲する。狙いは過たず、バージルの急所に向かって飛ぶが、バージルはその飛び道具を腰の閻魔刀で絡め取った。

「ちゅー」

「返すぞで」

一瞬惚けた彼女に対してからめとった手裏剣を地面に並べ、そのまま一閃をもつて打ち返す。

飛来した手裏剣は当然のように彼女の急所を狙ってきていたが、惚けたとはいえそれを回避できない折女でもなかった。

飛んで横に避ける。

バージルを見ればゆらりと納刀しているところで、その光景に背筋に奔るものを感じ取った折女は、避けた勢いそのままにその場に転がって、さらに距離を離す。

彼女がいた場所をバージルの次元斬もどきが嘗めていった。

跳ね飛ぶ様に起き上がる。

甘く見ている相手ではないと認識を数段階引き上げて、自身の獲物^カを抜く。

「ラウンド」

言葉を発したバージルの方を見てみれば、彼は言葉と共にミラージュエッジを投擲す

るところだった。

回転しながら迫るその一撃を余裕を持って回避する。

しかしながら追尾性能があるようで、彼女の避けた先に向かってラウンドトリップが先回る。

それを見て仕方が無いと、全力でその場を離脱すれば、ラウンドトリップの速度はそれほど速くない、無傷でその技を切り抜けた。

「死^{Die}ね」

同時に目の前にバージルが迫っていた。

足に無茶な負担がかかるのを承知で真上に飛ぶ。

疾走居合い。

バージルが得意とした技。

本来のそれであれば、おそらくはダメージを入れる事が出来ていたのだろうが、この技もまだまだ未完成。

自身の未熟さにいらだちを見せながら、疾走居合いの勢いを殺しながら振り返りつつゆっくり納刀する。

目が合った。

折女の呼吸は乱れている。

対してバージルは呼吸を乱されてすらいない。

その実力の違いに年若く有りながらもこれほどまで差が付けられれば、悔しさすら浮かばない。

せめて、一矢報いると折女が覚悟を決めた瞬間。

「何を勘違いしている」

納刀と同時に空中にいる彼女に向かって、次元斬が放たれた。

「くうっ!?!」

回避する。

くのいち技能による鉤縄を用いた空中移動を用いて。

それで1度目の次元斬はどうにかこうにか回避できた。

折女の予想外は、次元斬が連打できる類いのものである事だったか。

見るからに強力な威力を持ち、ほぼ瞬時に発生する上に飛来する軌道がほとんど見えない飛び道具など、性能として狂っている。

二度目の斬撃を受けて地面に転がった。

ダメージは大きい。

手足がばらばらになるかと思った。

だが耐えた。

しかし、残念ながら三度目の次元斬は流石に耐えきれない。

崩れ落ちる。

地面に血反吐を吐き散らしながら。

「トドメだ」

最後の一撃はミラージュエッジ。

凄まじい勢いで折女との間合いを詰めて……

ギイン。

と、金属音が周囲に鳴り響いた。

甲冑纏う一つ目の妖怪。

その妖怪がバージルの一撃を受け止めて見せた音だ。

「とどめの一撃で間に合うとは、流星は妖怪王と言ったところか」

「天狗より事の次第は聞いた。此度の件、我らが不始末と知っているがなにとぞ刀を引いてもらえぬか？」

ぎりぎりと剣の腹に突き立てられたミラージュエツジと刀がぶつかり合う。力がこもり赤熱したそれを見ながら、バージルは不意にあっさり剣を引いた。

「もとより、妖怪王と事を構えるつもりはない。トドメまで刺すつもりも実際はなかった」

「ありがたく」

あつさりと引いたバージルに政宗は頭を下げた。

そして折女を助け起こすと、バージルに問いかける。

「それで貴公は一体どのような用事で俺に会いに来られたのだ？」

「ふん。その前にその女の治療をしろ。死にはしないだろうが、その程度の時間を待てないほど狭量じゃない」

「これは、かたじけない。俺の家で、用件は聞こう」

そう言った政宗の提案にバージルはのって、彼の後に続いて彼の屋敷へと入っていった。

M i s s i o n 0 6
妖怪王独眼流政宗

政宗の館にて、バージルはしばし滞在する事になった。

その理由としては、政宗が折女がしでかした事の責を負うとバージルに伝えたからであり、バージルはスパルタ用武器についての心当たりについてを求めたが、やはり言うべきか、ある種当然と言うべきかスパルタ用の武器についての心当たりは政宗にはなかった。

政宗は妖刀として生まれ落ちた大妖である。

そのためか、刀に関する知識、感覚は鋭いモノがあつたが、生憎と小手具足、特に武器となり得るほどの強度と魔性を帯びたものに関してという問いには答えを持ち得ない。

その代替案として政宗がバージルに何か無いかと問われた際にバージルがしばしの滞在を願ひ出たのだ。

理由は二つある。

一つ目は奥州各地にあるダンジョン探索の拠点として使わせて欲しいという事。

もう一つは、目の前の男。即ち当代妖怪王相手の組み手が目的だ。

それについて政宗は二つ返事で了承とした。

折女の行った事に対する償いとしては破格の安さと言ってもいい内容であった事。そして何より

「折女を容易く打倒するその実力、この身で確かめてみたくないかと問われれば、否というのは嘘になる」

「ふ……。当代妖怪王の期待に応えられるかは知らんがな」

「謙遜を。純粋な力という意味では既に俺よりも上だろう？」

「さてな。レベルによる単純な暴力という意味ではそうかもしれない。しかして、種族としての違いがある。その違いがどこまで出るか。そこもまた問題だろう」

「などと言いつつも自信がある。そう顔に書いてあるが？」

政宗のからかうような言葉に対してバージルは答えない事で回答とした。

その自信のあり方は若さからのものか、それとも確固たる実力に裏打ちされたものなのか。

目の前の男を値踏みして、後者だと判じた政宗は戦いに胸躍らせた。

戦いが嫌いというわけではない。

殺し合いに発展する泥沼のそれを好むとは言わないが、政宗とて妖怪の類いだ。

そうある以上、闘争本能を満たす鮮烈な戦いには、憧れさえ抱く。

妖怪王として有る今、軽々しく戦う事が出来なくなつたこの瞬間であつてもそれは変わらない。

「しかし、胸躍る……か」

バージルと分かれて政宗は自身の心中で抱いた感情を吐き出すように呟いた。

その感情は随分と久しぶりに抱いた感情だったからかもしれない。

妖怪王ではなく、ただの妖怪として。あるいは、ただひとりの武人として、バージルと刃を交える事が純粹に楽しみだからこそ漏れた言葉。

折女は強い。

彼女を、まるで花を手折るように容易く打倒した男。

その実力を甘く見る事が出来るはずがない。

自身は妖怪王だという自負はある。されど、油断、慢心という言葉からほど遠い男。

それが独眼流政宗という男だった。

バージルもよくよく理解していた。

彼の館に逗留する事が決まって、自身が決して歓迎され得ぬ存在だという事を、バージルは分かっていた。自身が妖怪ではなく人間であると言うだけでも排斥されるに足る理由になるが、その上で政宗の妻のひとりを傷つけたとあれば、歓迎なぞ望むべくもない。

そう考えていたのだが。

「流石は妖怪王。統率まで完璧か」

「急に褒めだしてどうした？ 何も出せぬが？」

夕餉の席。

二人向かい合うように食事を取っていたバージルがそうこぼすと、唐突な彼の発言に

政宗は首を傾げて返した。

「なに、このような席からして貴様の心遣いがよく分かる。そう思ったまでの事」

「さて、何のことやら」

「ふん。先代にしたところで、貴様の他の妻達とて、あるいは妖怪達もこの状況を気に入りはすまい。が、当主手ずからの歓待とあらば、横やりを入れる事さえ無粋。それを理解できぬような慮外者は、貴様の部下にも妻にもいないらしいという事だ」

「ああ。愛すべき妻達と、自慢の部下達だ」

「さらりと答える。それもまた貴様のカリスマか」

「随分俺を褒め称える辺り、何か狙いがあるな。と言つても俺に求める事など一つか」

「察しもいい。と有れば隠すのは無意味か妖怪王」

夕餉の膳を空にしたバージルが政宗の一つ目をじっと見つめる。

それに応じるように、政宗もバージルへと視線を返した。

しばしの沈黙が周囲を支配する。

互いに鬨気の類いを出し合ったりはしていない。されど、ただ見つめ合う静謐さが空気に伝播して、緊張感を帯びさせていた。

「いいだろう。……しかし、随分と急ぐ。ダンジョンの探索はいいのか?」

「居心地が良すぎるのも考え物という事だ。人と妖、今はまだ交わるべき時ではないだろう?」

「いずれはと信じているが」

「否定はしない。だがこの空気は毒だ。故に、早々に決めさせて貰おう」

「あい分かった。では、いつ執り行う?」

「今からでも……と言いたいところだが、この館を破壊するのは流石に俺も躊躇いがある。貴様は常在戦陣の心構えがなっているが、他の者にまでそれを求めるのは酷だろう？」

「心遣い、感謝する。……いや、これは心遣いではないか」

「無論、貴様と本気の戦いをするための、俺の都合だ」

言つてバージルは立ち上がった。

伝えるべき事は伝えた。

もう成すべき事は無い。そう言わんばかりに自分に与えられた屋敷の一角へと足早に去つて行つた。

その足取りが雄弁に告げる。

決戦は明日だという事を。

その事実には政宗は一人、震えをかみ殺した。

武者震いだ。だが、その震えを抱くのはまだ早いと。

そして、願いの日が昇る。

朝日と朝靄が見える中、鮮烈な闘気を放ちながら佇むのはバージルだ。目を瞑り、自身に埋没するかのように集中を深めている。

それに応じるように朝靄を切り裂いて、一人の妖怪がその場に姿を現した。妖怪王。独眼流政宗。

自らの愛車に乗ることさえなく、ただ徒でゆつくりとバージルのもとへと歩いてくる。

そしてある程度の距離にまで近づいた時、不意に問いかけた。

「待たせたか？」

「さほど」

「そうか」

政宗がそう答えると同時、バージルがその剣を抜き放つ。

ステインガー。

並の戦士であれば気づく前に絶命しているであろう鋭さを誇るその一撃を、政宗は腰の妖刀を持って受け止めた。

火花が散る。

青白い火花はバージルの魔力が散った光だ。

だがそれを気にすることなく袈裟斬り、振り回すような二連撃。フィニッシュに強烈な突き。

しかし政宗はそのことごとくを剣で受けて、最後の―撃を鎧を掠めさせることのでか
す。

反撃として、真横に刀を一閃。

それを回避するためにバージルは真上に逃げる。

戦いにおいて空中に逃げるのは本来愚の骨頂だ。一撃はそれでかわせたとして追撃を防ぐことはかなわないからだ。必然、それを理解している政宗は一閃を振るった軌跡の後に、真上に刀を突きあげる。

バージルの姿が掻き消えた。

トリックダウン。

空中より後方へ大きく距離を瞬間的にとる魔技だ。

納刀の態勢より放たれるのは次元斬・偽。

三度、抜くことさえ見せず放たれたそれを、一撃目は鎧をもって受け二撃目は前に飛び出ることでも着弾点をずらすことで回避、三度目のそれはバージルが抜く瞬間に刀を差し込むことで止めて見せた。

剣劇が始まる。

それはどちらが押していると容易く理解できる類のそれではない。

合して数合で互いの力量を理解しあい、純粋な剣の力量はほぼ五分であることを認め合う。

だからこそ、政宗は妖怪としての能力を使うことを拒んだ。

だからこそバージルも幻影剣を使った奇襲策を捨て去った。

目の前のこの男は、自身の剣の力量をもって打倒してこそ意味があると、互いに通じ合ったからこそ。

火花が散りあう。

互いに汗を散らせあう。

バージルの斬撃は紙一重で回避された。

政宗の一撃は皮一枚で受け流された。

互いが互いのぎりぎりを攻め合っている。

組み手というよりも本番のそれに近い殺し合いは、されどその力量の近似によってま

るで遊んでいるようにも見える。

事実。政宗が楽しんでいないといえば嘘になる。

事実。バージルがこの時間を楽しんでいないといえば嘘になる。

実力伯仲故に引き起こされる力量の上昇は、いわゆるミックスアップの類に近い。

闇魔刀の一撃を真つ向正面から受け止める。

引き起こされる火花が互いを一瞬だけ照らし出す。その表情は互いにとても楽しそうで……

「うわー、政宗様楽しそう」

見学に来ていた政宗の妻たちをして羨望の視線を送るほど。

彼女たちは政宗と共に長くいて、お町に至っては戦ったこともある。

だが、こうまで楽しそうに刀を振るう政宗は今まで見たことがなかった。

しかし、それは当然か。

彼は妖怪王の名を背負う大妖怪である。

である以上、彼の戦いには責務が付きまとう。

妖怪たちのすべてを背負っているという覚悟が彼に力を与える反面、重圧も与えてい

た。

この戦いは違う。

あくまで相手が望んだ、力量比べ。

本来なら負けても構わない。あるいは胸を貸す程度のもりだった政宗だが、ここに至って負けてなるものかと渾身を振り絞る。

剣戟音が響き渡る。

高く遠くへどこまでも響き渡れと言わんばかりに。

その一撃のたびにバールはさらなる技巧をもつて反撃し、その一撃に対して政宗は自身でも信じがたい力量を發揮して受け流し反撃する。

そんな戦いが続く。続いて、続いて。

合すること既に千を越えた。

ただひたすらに力量を比べあうそれは、一日中ぶつ続けで続き、次の日になっても収まらず、果ては三日三晩ひたすらに打ち合いが続いて。

「ええ加減にせんかこの戯けどもっ!!」

ついにはお町が雷を物理的に落とすまで終わらなかつた。

「なにをすのお町」

そして雷をさらりとかわして文句を言った政宗は久方ぶりに妻たち全員から説教を食らうことになったのだった。

「得難い時だった」

つい呟いてしまったバールも、もちろんその説教に巻き込まれたのは言うまでもない。

渋々と正座で説教を受けるその姿からは、先ほどまでの鬼気迫る戦いっぷりは伺い知れなかったが、二人とも反省した様子が見えず説教はかなりの時間続くのだった。

Mission07 魔法学院にて

Japanより出でておよそ三ヶ月。

バージルは既に大陸に戻り、新たな日々を過ごしていた。

冒険者家業を続けているというわけではなく。

もつと単純に、今の自分にしか出来ない事をしていた。

場所はゼス王国。魔法使い達が作った、魔法使い達の楽園。

その場所にてバージルは学生をしていた。

彼らしからぬ事ではあるが、ゼス王国の魔法知識を吸収するためにはこれが最も手つ

取り早いと考えての手法で有り、数少ない合法的な手段であったための方策だが、学生生活というのを存外楽しみながら送っていた。

授業に出て、放課後は限界ぎりぎりまで併設されている図書館にて魔法論文をあさり、夜は生活費や学費、経験値を稼ぐために周囲のモンスターを狩るか、迷宮に潜る。

そんなサイクルを繰り返す潤いのない日々ではあるが、彼にとってみれば潤いなど求めておらず、貪欲に魔法知識を身に付ける事が出来る上に、経験値も稼ぐ事が出来る現状に文句はなかった。

数少ない文句と言えば……

「バージル先輩」

「山田か」

「山田です。それでこの術式についてなのですが……」

「……」

辟易するほどに話しかけてくる、目の前の少女くらいか。

情報魔法を得意とし、このナダルサ応用学校では珍しい平民出身の一級市民である彼女。

その彼女がバージルに目を付けたのにはいくつか理由がある。

一つ、バージルが自由都市よりの転入生として扱われた際の編入試験において、試験官担当教諭を文字通り一蹴した事における魔法力量の高さ。

一つ、魔法Lvは1に満たないにも係わらず努力による研鑽により、凄まじいまでの魔法応用力と保有魔力の高さを示した事。

そして、それほどの実力を保有しながらも未だにたゆまぬ研鑽を続けるバージルの姿勢。

それら全てが、山田……現在のゼス四天王である彼女にとって、理想的な姿だった。

それこそ、今年度を最後に学生生活にけりを付けようとしていた彼女が、もう少しだけでも学校に残る事も検討したほどに。

この国の王、ラグナロックアーク・スーパー・ガンジーとはまた方向性の違う、魔法使いとしての理想。

それが、バージルに対する彼女の抱く感想だった。

「……俺に人様に教示できるような知識は無い」

「そうかもしれません。しかし、先輩の発想にはあるいは知恵にはいつだって驚愕させられます。ですので、このような状況下においてどのような術式改良を行われるのかは、大変に興味があります。必要とあれば四天王としての協力を要請してもかまいませんが……」

その言葉にバージルはため息をついた。

四天王のからの正式な要請とあれば、どれだけ時間が取られるか考えたくもない。

そんな事に協力している暇はバージルにはない。

だからこそ、ついたため息をであり、同時に山田に対する嫌みでもあった。

無論そんな事を理解できない山田ではなく、言外にとつと四天王として志願しろという無言の圧力でもあるが、それをバージルは理解した上で無視していた。

四天王の座位に興味は無い。

彼が興味を抱くのは自身への強さに役立つものと、運命に干渉できうる何かだけ。

そういう意味では四天王というゼス王国における最高地位の座も彼にとっては役不足でしかなかった。

とはいえ、彼女からの問いを無碍にするほどもつたいない事もまたない。

現役四天王とのつながりが得がたいものである事も確かだ。

「……………これでもいいか？」

「これは？」

「魔法の矢の基礎式に手を加えたものだ。それぞれ威力、貫通力、衝撃力に優れるように改良してある」

「なるほど……？」

「時間さえかければ誰でも扱える魔法で有りながら、汎用性、継戦能力に優れている。これ以上に軍人が習得している事に好ましい魔法もあるまいに」

そこまで言つてバージルの言葉に彼女は理解を示した。

これは決して彼女の頭の出来が悪いというわけではない。事実として彼女は未来にてゼス王国の四天王筆頭として国をもり立てていく才女である。その才覚は常人のものとは一線を画す。

とはいえ未だ彼女も15に成り立ての少女でしかなく。バージルの意図を正確に理解できるほどに視野が広いわけではなかった。少なくとも今は。とはいえ、最後まで伝えずともバージルの意図を理解する辺り、地頭の良さがうかがえるが。

それはさておきとして、バージルは本をぱたりと閉じた。

自身が書き加えた術式を夢中になって検討している山田の横を通り抜けて、図書館の出口へと向かう。

図書館の利用時間の限界が近いため、酒場で食事を取った後ダンジョンに向かうためだ。

バージルが図書館の出口に手をかけたとき、山田がバージルに向かって思い出したかのように言った。

「そういえば、もう少して四天王の欠員充足試験が始まるらしいですけど、先輩は受けら

れるんですか?」

「……ああ。それがどうした?」

「えっ!? 嘘でしょ?」

「こんな事で嘘をつくつもりはない。……それで? それの何が問題だ?」

「私……何度も先輩に対して四天王に推薦しますって言いましたよね?」

「ああ、そうだな。それで? それがどうした?」

「いやいやいや、試験もなしに四天王になれるチャンスを棒に振っておいて、どうして四天王試験は受けるつもりなんですかって事ですよ」

その言葉にバージルはため息をついた。説明しないと納得しそうにない彼女のために、図書館の扉から手を離して背を預けると、彼女に向き直る。

彼女の気持ちも分からないでもない。

現在の彼女の立場は四天王で有りながら、かなり微妙だ。

いかに才人とはいえ、若輩者で有る彼女では国の運営は難しいのだろう。

いや、そもそも運営するところにまでいっていないのだろう。

魔法使い至上主義、あるいはそうお題目を掲げた貴族至上主義のこの国で、平民出身

の彼女が政治を回していく事は難しい。そこにどれほどの熱意と才覚があっても。

だからこそ、彼女がするべきは地固めだ。

自分を支持するものを増やし、影響力を拡大させる。

そのための方策の一つが、バージルと行っている軍事魔法使い基礎能力向上計画があり、同時にバージルの四天王への勧誘だった。

そのうち片方、軍事魔法使い基礎能力向上計画は案として形をなしてきている。

彼女肝いりの計画として提出すれば、彼女の功績として四天王の中でも確固たる地位を築くに足る結果を示すだろう。

そして同時に、自分派閥の四天王。即ちバージルを共同研究者として推薦する予定だったのだが、バージル自身四天王には興味が無いと、彼女の推薦を受けないと断じたため、結果として山田の計画は半分しか成功しなかったわけだ。

それでも、いつ彼がその考えを翻してもいいようにと、毎日のように魔術理論の更新を彼と練り、彼が望めばいつでも四天王に推薦できる状況を整えていたところに、まさかの選抜試験参加の言葉だ。

彼女でなくとも、嘘でしょと文句の一つも言いたくなるろう。

理由を聞くまでもてこでも動かないという意思をこめた瞳でバージルを見つめる山田。

その視線を受けてバージルは肩をすくめる事で答えとした。

その態度に少しばかり激しかける山田。

そんな彼女の怒りを遮るようにバージルは言葉を紡いだ。

「別段、四天王の座位とやらの興味は無い」

「？ 四天王の地位に興味が無いのに、何故四天王の試験を？」

「四天王に興味は無いが、その試験に出てくる人間には興味がある。だからこそ、だな」

「四天王試験に出てくる人？ 一応応募者の個人情報秘せられているはずなんですけど？」

「それでも噂は流れる。それを精査すれば自ずと有力な参加者なんぞ絞れるというものだ」

「…………それはそうですけど。…………それで、先輩はどなたに興味を抱かれたんですか？」

「そこまで答える義理はないが……それではお前は納得しそうにないな」

そう言うとバージルは面倒くさそうな表情を浮かべながら再び図書館の入り口へと手をかけた。

ガチャリと、扉の開く音がする。

納得しそうでないと分かっているながら、それでも立ち去ろうとするバージルに山田が文句を付けようとしたそのとき、バージルはそんな彼女を押しとどめるように答えた。

「ナギ・ス・ラガール」

「ラガール……元四天王のひとり……？」

その彼女の独り言に答える事無くバージルは図書館を立ち去っていった。

「おめでとう御座います。これでバージルさんのレベルは101になりました」

「そうか」

ダンジョン、廃棄迷宮。

ゼスにおける危険物廃棄場所にして、あらゆるものがどこからともなく流れ着く不可

思議な迷宮。

その深層にほど近いところで、バージルは自身のレベル神を呼び出し、レベルを上げていた。

人の身ではほとんど到達者はいないであろう三桁レベル。

レベルという枠組みだけでいえば、達人という枠組みよりも人外のそれに近い領域にバージルは近づいていた。

それでも。

「チイ……」

漏れ出るのは舌打ちのみ。

不断の努力をもつて鍛え上げているというのに、彼が目指す頂には遙かに遠い。

レベルの上限は未だ見えないが、その上がり方も随分と緩やかになってきている。そのことも、彼にとっては不満だった。

「力を。 I ^{もっ} need ^と more ^カ power ^を」

つぶやく言葉は彼の魂から漏れ落ちた渴望そのものだ。

そして、この場所には彼が求める何かがある。

そう信じて奥へ奥へと向かう。

廃棄迷宮には時折訪れた者が渴望する何かを指し示す看板が現れる事がある。

実際に史実における6の際にランス達はここを訪れ、望む物を得ていた。

それは魔剣カオスであったり、才能限界の突破であったり、多種多様で、また複数に上る。

ならば、望む物がただ一つに限定されている今のバージルであればどうか。

バージルはある種すぎるような思いで、この場所に潜っていた。

そして、看板は確かにそこに有り、彼の望みを叶える事になる。

咆哮が轟いた。

迷宮全てを揺らすのではないかと勘違いしそうなほどに大きな咆哮。

その咆哮を受けてバージルは笑みを浮かべた。

そして、迷い無くその咆哮の主がいるであろう場所へと向かっていく。

そこには果たして。

彼の望んだ物があった。

M i s s i o n 0 8 四天王試験

バージルが廃棄迷宮に挑んでから数日後。

彼はぼろぼろの姿をさらしながら、ナダルサ応用学校に彼は現れた。

その姿を見た山田は凄まじく驚き、彼を問い詰めるためにそばへと寄る。

「先輩、何があつたんですかっ!？」

「別段、何もない。いつも通り、力を求めて迷宮をさまよっていただけだ」

「嘘です。先輩ほどの実力者がこんなにぼろぼろに……」

「嘘ではないさ。ただ、そうだな、未だに俺は未熟という事。それがよく分かったよ。俺が憧れた人であるのなら、一太刀で十分だったろうに」

苦笑するようにつぶやきながら、バージルは近づいてきた山田を追い払う。

しかしながらその行動にも何時ものような切れはない。

その様子にかなりの疲労がたまっていている事を察した山田は肩を貸そうとするが、その動きさえ先に制止されて、彼女はため息をついた。

「無茶を……」

「そんな事はどうでもいい。それよりも、俺の記憶が間違いで無ければ今日が四天王試験の日はずだが、間違っているか？」

「……間違つてはいませんが、出るんですか？ その状態で」

「ふん。この状態なのは俺自身の失態だ。そのことをもって今日は取りやめてくれ等という懇願をするほど、俺は間抜けのつもりはない」

「で、ですが……」

「ですが何ももない。試験会場はこの学園の体育館だったな？　向かわせて貰うぞ」

そう言うとバージルは宣言通りに体育館へと足を向ける。

その瞬間凄まじい魔力の奔流が、体育館より漏れ出てきた。

その奔流だけで山田の魔力量では及ばない事を理解させられるほどの量。

人知における到達点と言っても過言ではないその魔力量。それを感じ取りつつもバージルはまるでそよ風の中を歩むようにその奔流の中を歩いて行く。

それに気がついた山田は慌てて彼の後を追う。

体育館の中央、魔力測定装置のそばに立っていたのは美しい金髪を持つ少女だった。

自身と同じか下手をすれば年下であろう少女の姿を見て山田は驚きの表情を浮かべた。

これほどの魔法使いが、名を馳せる事もなく市井に眠っていたのかと。

あるいは、これほどの魔力をもつ魔法使いを相手に魔法比べを行う必要が出てきたバージルが、それをして一切ためらいなく魔力測定器に近づいていった事に対してか。

バージルが魔力をこめる。

流麗にあるいはあまりにも鋭利にか。

こめられた魔力量はそれほど多くはない。

だが、その質が信じがたいほどに高められている。

よく練り込まれた魔力は、少ない量で術式を起動させ、より効率的に、より効果的に術式を発動させるが、これはそのレベルではない。

練り込まれた純然たる魔力は、その質を持って術式を破壊するほどに鋭く研ぎ澄まされている。

その量と質を計る事を目的とした魔具をあつさり破壊してしまうほどに。

その様子を見て、バージルの前に試験を受けていた少女は僅かに笑みを浮かべた。

退屈な試験だと思っていた物が、思いもよらぬ楽しみに巡り会った事に対する笑み。

それは戦闘狂の浮かべる類いの笑みではなく、自らが圧倒的強者であるという自負から浮かべる笑み。自身の敗北など微塵も考えていないが故の笑み。

その笑みを見て、バージルは僅かな憐憫の念を抱いた。

それは彼女、ナギ・ス・ラガールの過去を知るが故の憐憫だ。

呪いのように、父に愛される事のみを目的として動く彼女。

そのあり方はいずれ救われる事が確定しているが、それでも実際に見てしまえば目を覆いたくなるほどに悲劇的だった。

悲惨で手の施しようがない。

だからこそ、あるいはそれ故に。

バージルは彼女の事を無視した。

どうでも良い存在だと言わんばかりに、視界に入れても視認する事をしなかった。

その様子に、ぴくりと彼女の眉根が動く。

歯牙にもかけていなかった男より、歯牙にもかけられなかったという事が彼女の心の内を少しだけ泡立たせた。

空気が一触即発に染まる。

その僅かに手前で、男の声がその空気を一変させた。

「両者ともに実に見事。内包する魔力量においてはナギの、その質においてはバージル。どちらも甲乙付けがたし。よってこれより二次試験、力量試験に移りたい」

カリスマ性のある大きく野太い声。

その声の主を見れば、その声にふさわしい体躯をした男がその場に立っていた。

その男こそ、この国の国主ガンジーだ。

その周囲には現役四天王である三人がいる。

それはまあ当然の話だ。

四天王最後の一人という重大な立場を決めるはずの場所に、残りの四天王と国王がい

ないはずもない。

特にガンジーは、四天王制度を一変させたのだからいない方が不自然であった。

「力量試験は模擬戦とする。相手を殺さずに無力化する手腕を持つて新たな四天王にふさわしい事を証明せよ。試験会場は外のグラウンド。両者ともに異議、もしくは質問はあるか？」

その問いに対して二人は特に反応を見せない。

それこそ、ぼろぼろの状態であるバージルからは異議が出てもおかしくはないはずなのに、バージルは一切の異議を挟まず、その態度に不満さえ浮かべていない。

常在戦場の心得。

いかなる状況、状態をも自らの責としているが故のあり方は、まさしくガンジーが求めるあり方でもある。ガンジーはバージルに対して期待を抱きつつ場所を移す。

移動自体は五分とかかからない。

一次試験の会場である体育館を出てすぐのグラウンドに移動しただけなのだからそれは当然だ。

バージルとナギは互いに言葉を交わす事もなく、当然のように距離を取って相対し、

ガンジーよりの合図を待つ。

研ぎ澄まされた魔力と、膨大な魔力。

二つの強大な力同士がぶつかり合い、相食むように見えるのはあるいは力の相克にも似ている。

開始の合図は端的に。

示されると同時に両者が動く。

互いに言葉を放つ事無く牽制の魔法の矢が飛び交う。

バージルの物は無属性の剣の形、ナギの物は闇属性のスタンダードな物が。

こめられた魔力量はナギの方が、魔力の質はバージルの方が上で、ぶつかり合った瞬間に明暗を即座に分けた。

勝ったのはバージルの魔法の矢。

即ち幻影剣である。

ぶつかり合った魔法の矢を切裂きナギの元へ迫るそれは、彼女の展開した魔法バリアによつて阻まれて消える。

その様子を見てナギは驚いたようにつぶやいた。

「まさか、競り負けるとは」

「ふん。よもや、今まで一度たりとも競り負けた事がないとは言うまいに」

「そんな事は言わない。だが、私の父以外に基礎比べで負けるとは思ってもいなかった。それだけの事」

「純然たる鍛錬の量が違う。当然だ」

「鍛錬か……ならば私は、積み上げた業が違うとでも返そうか？」

「業か。……ふん、どうでも良い。所詮は井の中の蛙。挑むのなら止めはしないが、火傷では済まん。覚悟してから来るんだな」

そう言うのとバージルは構えを取った。

それは剣を抜き放つ類いの構えではない。

徒手空拳、少なくとも拳を使う者達が取る類いの構え。

バージルとある程度の親交がある山田でさえ見た事がない構え。

その構えを見て、ナギは即座に反応した。

本能が警鐘を鳴らしたからだ。その構えをバージルが取った瞬間に彼女の脳裏に敗北がよぎる。

故に。

無詠唱、最高速で彼女は全力をもつて魔法を解き放つ。

死爆。

闇属性の広範囲魔法。

相手の周囲全てを闇属性の爆風が覆う彼女の得意魔法の一つ。

当然のように人ひとりを殺せるに十二分な威力を保有する魔法は、狙い違う事無くバージルに炸裂し。

「愚かな」

言葉と同時に光が顕現した。

されどその光は人が惹かれる類いの光ではない。

あらゆる物の目をくらませ、焼き殺す殺戮の光。

輝ける死そのものにも似た極光が、地面に叩き付けられたバージルの拳より発生し、

死爆により発生した闇の全てを駆逐する。

そして再びバージルは構えを取った。

その両手両足には輝く小手と具足が纏われていた。

「悪魔兵装ベオウルフ。貴様で試させて貰うぞ」

言葉と同時にバージルの姿がかき消えた。

瞬間移動じみた高速移動術トリックアップで頭上を取ると同時に、空中よりナギに向かって放たれる流星がごとき蹴りの一撃。

その一撃をナギは魔法バリアで受け止める。

再び極光が一瞬周囲を照らし出した。

凄まじい破壊の力が魔法バリアを容易く砕く。

そのまま空中に戻り、再びバージルは流星脚を放つ。

今度は受けきれないと察したナギはとっさに小規模な魔法の矢を大地に放つ事で地面を爆破、その反動で自身を吹き飛ばす事でバージルの一撃を回避した。

そのまま転がるように魔法の矢を一つ、二つ。

それをバージルは拳をもってたたき落とすと、余裕を見せつけるように再び構えを取ってナギと相対した。

侮られている。

そう直感したナギの思考が僅かに熱くなったその瞬間を見越したかのように彼女の廻りを幻影剣が取り囲む。

烈風幻影剣。

相手の周囲で待機し、一発でもヒットすれば相手を真上に吹き飛ばすバージルお得意の魔法の一つ。

自身の思考が赤熱化する事まで読み切った実にクレバーな一手に、ナギは最速で詠唱することによって返答とした。

放つのはデビルビームの魔法。

バージルの力量を見て瞬時に冷静に戻ったナギの魔法選択は正しく、彼女の周辺を巡る幻影剣全てを砕きながら、バージルの元へと迫る。

「フンッ!!」

バージルは裂帛の気合いと共にデビルビームを蹴り上げた。

「なっ!？」

信じがたい光景にナギよりらしからぬ驚愕の声漏れた。

しかしそれは当然だろう。

魔法とは基本的に必中である。

魔法の矢でさえ対象を追尾する上に弾速も有り、本職の忍者でさえ回避は不可能な代物となる。

それがデビルビームともなるとほぼ即着しているに等しい。

何せ対応する炎属性の魔法がファイヤーレーザーの魔法なのだからそれは必然だろう。

下手をすれば銃弾を蹴り上げる以上の難易度の絶技である。

「なるほど。ある程度 of 感覚はつかめたか」

しかし、その絶技を見せたバールに気負いはない。

この程度、出来て当然だという態度にナギは眉根を寄せる。

このままの条件では厳しい。それが手に取るように分かるからだ。

ナギは既にバージルが魔法使いではなく魔法戦士で有る事を、それも戦士側に寄ったタイプのものである事を看破している。

あれほどの絶技を見せられればいやでも理解できる事ではあるが、その上で自身に匹敵する魔法の技量まで備えているとあれば、自身の勝算はかなり小さくなる。

今まで感じた事のなかった敗北に対する恐怖。

それが心の内で生まれた事を自覚しながら、それでも父の期待に応えるために彼女は再び魔法を詠唱しようとして……

「ギブアップ。俺の負けだ」

バージルのそんな言葉に肩すかしをくらったのだった。

Mission09 戦いの間に

「いやちよつとお?」

「うるさいぞ山田」

「いやいやいやいや、うるさくもしますとも先輩!? どういうつもりなんですかつ!?」

バージルの言葉にいち早く反応したのは現四天王のひとりであり、バージルの後輩でもある少女山田だった。

彼女の問いについてバージルは特に答える事もなく、さっさと踵を返してこの学園における自身の定位置、図書館へと足を向ける。

その様子に納得できないと言わんばかりの山田は彼について詰問のように問いかけた。

「何故？ どうしてですか？ あのままいけば、貴方がっ」

「そも、四天王の座位に興味は無い。既にそのことは伝えていたが？」

「とはいえ、態々得られる地位を放棄してまで、切り上げる必要なんて無いでしょうにっ
!？」

「四天王の座位に興味が無いからこそ切り上げたのだ。そこにそれ以上の理屈はない。だから、貴様の事を見下したわけではないぞ？ ナギ・ス・ラガール」

バージルはそう言うと、未だに不平不満を漏らしている山田を無視して、バージルに鋭い視線を送って来ていた少女に向けて声をかけた。

その言葉にナギは不機嫌さを見せる。

そして、それと同時に自身が不機嫌さを見せた事に対して、驚きの感覚を抱いた。

彼女の目的は父の目的を叶える事にある。

そしてそれだけしか抱いていない。四天王職にだって彼女自身はそれほど執着はない。それこそ、父が望まないのであれば、こんな試験に出てくる事はなかっただろう程

度の関心しかない。

故に。

「私も、四天王試験に対して大きな興味は抱いていなかった」

言いながらナギは魔力を高めたまま、バージルと向き直る。

そんな彼女の様子を見て、バージルは良い傾向だと彼女に向かって構え直す。

「だが、何故だろう、貴様相手には胸が苛つく」

ふくれあがる魔力。

緩やかに、淀みなく紡がれる詠唱。

闇属性の破壊光線。

即ち黒色破壊光線。

その照準が明確な殺意をもって、バージルに向けられているという現状。

それを止める事は周囲の四天王はおろかガンジーにすら出来なかった。

全力で放たれるであろう黒色破壊光線の威力は知っているはずなのに、場の空気があ

るいはバージルが放つ圧倒的な存在感が、二人への干渉を拒んでいた。

「黒色破壊光線」

漆黒の魔弾が放たれる。

手加減など一切されていない、現存する魔法使い最高峰の威力を持った破壊光線。

それが、バージルに迫る。

不意に、柄から刀を抜き放つ音が聞こえた。

あまりにも自然に、あまりにも緩やかに、されど瞳に映る事さえ許さない高速をもつて抜刀されたその一撃は、闇魔刀の魔力とバージルの力量が合わさって次元を割断する斬撃となってナギの放った黒色破壊光線とかみ合って見せて。

一瞬の拮抗さえ許さず、黒色破壊光線を切り伏せて見せた。

抜き放たれた剣がゆっくりと納刀されていく。

最後に僅かな金属音を立てて、自身の武器を腰に戻した後、バージルは問いかけた。

「満足したか？ ナギ・ス・ラガール」

「なるほど、今はお前の方が強い。認めよう」

そう言いながらもその瞳に宿る光は剣呑な色を消す事無く、射貫くかのようにバージルに向けられている。

だが、その視線を当然のように無視して、バージルはナギの事さえも無視して、その場を立ち去ろうとする。

「だが、だが……だ。次は、いやいずれは必ず私が上に立つ。そのことを覚えていろ、バージルっ!!」

その言葉を聞いてバージルは歩みを少しだけ止めた。そして、彼女の方へと視線を向ける。その目には僅かな驚きの色が見えていた。そして彼女に対して問いかける。

「俺を越えたところで、お父様は喜ばないぞ?」

「この身の内より出でる感情に、お父様は関係ない。ただ、私がお前を打倒したい。それだけの事。そこに、何の不都合がある」

「……不都合はないが……」

驚いた。

その言葉を飲み込んで、されどナギにそれ以上の何かを返すでもなくバールは歩みを再開させた。

その驚きは、この先の史実を知るが故のもの。

父の愛を求め、父に裏切られ、そして破滅の道をひた走るはずの少女にこんな感情があつたというのは、間違いなく驚くべき事だ。

あるいはこの熱情を抱く姿こそ、彼女の本来の姿なのかもしれない。

父親に狂わされる事無く、まっすぐに育てば、魔法使いとしてのプライド高く、負けず嫌いな性格に育つはずだったのかもしれない。

「業か」

彼女本来の性質全てを塗りつぶし、魔法使いとしての在り方のみにも価値を求めた彼女の父親。

それは確かに人の業の深さなのだろう。だが……

「それを、否定できる立場にもまた、無いか」

力を求め、力のみを求め続けている自分自身には特に。

自嘲するではないが、ふと、そんな事を思いつつもバージルは何時もの図書館に入り、小難しい魔法書を読み始めた。

暫くして

どうやら、後のごたごたの片付けをし終えたらしい山田が、図書室へと入ってきた。

バージルは入ってきた彼女に一瞥だけ送ると同時に、興味を失ったかのように再度読書へと戻る。

そんな彼の近くに山田はつかつかと近寄り、そしてバージルから本を取り上げようと
して、その瞬間バージルに本をぱたりと閉じられてつかみ損ねた。

「……なんだ？ 山田？」

「なんだ？ では有りません!! どうして、どうしてですかっ！ あのままいけば四天王になれたというのに」

「その問いには以前答えただろう。四天王の座位に興味が無いからだ」

「っ……」

バージルの言葉に山田はとても悲しそうな顔をした。

らしからぬ、悲痛な表情。

その表情を見せられて少しも心が痛まないとさえ嘘にはなる。されど

「……俺にはやる事がある。それを成し遂げるためには四天王の座位なんぞにかまけている暇はない」

「やる事。……では、それは一体何なんですか。一体何が貴方をそんなにも駆り立てるんですか？」

「力だ」

「は？」

「だから、力だよ山田」

そう言うとバージルは閉じていた書物を再び開き、読書を再開した。その様子を見ながらも、山田の問いかけは止まらなかった。

「力。先輩はもう既に十分強いと思いませんか？」

「足りない。まだまだだ」

「先輩ほどの力量を持ってまだまだ、なのですか？」

「ああ。当然だ。俺が理想とする在り方にはほど遠い」

「……四天王の地位にあれば力の追求、研究にプラスになる事もあると思いますが……」
「必要ない。四天王につけば余計なしがらみも出てくるだろう。そのしがらみは邪魔だ」

「しがらみ全てを邪魔だと切り捨てるその在り方はとても悲しいですよ先輩。その在り方は孤独です」

「自ら望んで高みを目指し、その果てに至った孤独は孤高と呼ぶべきだ。そこを間違えるな」

「言葉遊びには興味ないですよ、先輩。私が知りたいのはどうしてそう、一人きりになってまで力を求めるのか。多くの人の力を借りて、多くの人と共に手を取り合って生まれる力。その力の方が大きく強いのに」

「その力を手に入れるのは、俺の役目ではないからだ」

「え？」

「しゃべりすぎたな。もとより貴様に納得して貰いたいとは思っていない。ただ、俺の四天王就任はあきらめろ。力の有無で言うのであれば、あのナギとて、十分四天王にふさわしい力を示しただろうに」

「……彼女ではこの国を変える人材にはなり得ませんから」

「……」

山田の悲痛な声にバールは押し黙った。

山田の言葉が的を射ている事を理解しているからだ。

だからといってバールに四天王をする気はかけからも無い。

ゼス王国での目的は既に果たした。

三つ目の魔具を既に手に入れたからだ。

そんな彼がゼスにとどまる理由は薄い。

だけど、そのことを彼女にそのまま伝えるにはあまりにも酷だった。何より、自分自身がこの国を離れるつもりである以上は特に。

「いずれこの国が変わるときも来る」

だからだろうか、彼女に予言のような、すぎるための言葉を残そうと思ったのは。

「ふふ、それが一体何十年先になるのか、私は不安で仕方ないですけどね」

「いや、存外短い期間で変わらざるを得なくなる。その時に少しだけ力を貸してやろう」

その言葉に山田は小さく息をのんだ。

それはバージルが力を貸すなどと言う言葉を出した事による驚愕だった。それに加えて、この国の変革を予見した事もそうだ。

悪習はびこるこの国が変わる事など、そうそう無いと四天王筆頭である山田をして思えない。だと言うのに。バージルの言葉にはどこか人を信じさせるモノがあった。

長いため息が山田より漏れた。

それは納得できない事を無理矢理に納得するための区切りとしてのため息だ。

それを聴いてさえ、バージルの心内に一切の躊躇いは生まれなかった。

それ山田は彼の表情を見て悟りながらも、そういう男だからこそ信が置けるのだとも思う。

地位や財に固執する事無く、ただその言葉のトオりに力のみを追い求めるその有りさまは、決して正しいとは思わないが、確かに人を引きつける魅力があった。

「それで？ 先輩はこれからどうするんですか？」

「どうするとは？」

「とぼけなくても、先輩がこの学園に残るつもりがないってのは分かりきっています。無口ではありませんけど、無表情というわけではありませんから、先輩は」

その言葉にバージルは僅かに眉根を寄せた。

わかりやすいつもりはなかったが、表情に出ると言われた以上、洞察力に優れたタイプを相手にするときは気をつけなければならぬと、少しばかりずれた事を考えながら

も、山田には伝えておくべきかと言葉を紡ぐ。

「魔軍領に入る」

「は？」

「魔軍領に入る」

「い、いや、聞こえなかったとかそういうものではありません。いや、正気ですか？」

「人の領内で求められる力には限度がある。そして、俺の場合は限度が近い。これ以上を求めるのなら魔軍だろう？」

「それは……そうかもしれないませんが……死にますよ？」

「死ぬならそれまでの事。だが、死ぬつもりはない。この魂の渴望。その果てにたどり着くまで、俺は決して死にはしない」

そう言いながらバージルは黙々と本を読み続ける。

残るページは少し。

それを読み終えれば、彼はきつとこの場所を離れるのだろう。

それを止める事は出来ない。

だから。

「はあ……」

山田は大きなため息をついた。

そして、先輩へのせめてもの餞として一枚の書類を書き上げて、バージルに手渡すと図書館を立ち去る事にした。

送ったのはマジノライン通過の許可証だ。

四天王筆頭としてのサインを書いた正真正銘の本物。

そこにこめられた意図を、受け取ったバージルは理解して苦笑する。

「戻るつもりはないさ」

魔物と闘うための絶対防衛ライン。

その場所の通過許可とは即ち。

その場所を通ってでも構わないから無事に帰ってきて欲しいと願う、少女の小さな思
いだった。

Mission 10 魔物領野営地点

ばちばちとはじける炎を見ていると、心が落ち着いてくる気がする。

夜の野営、魔物領において人間がこんな事をしていれば自殺行為なのだろうが、野営地の主、バージルにそんな事は関係なかった。

何時ものように切り捨てた魔物の可食部をたき火で炙りながら、瞑想にふけっていた。

周囲は静寂が包んでいる。

穏やかな空気が流れ、知らぬ者が見ればこの場所が魔物領だとは思わないだろう。しかし、それには理由があつた。

「ケケケ、相変わらずむちゃくちゃな野郎ですねー」

周囲に築かれた魔物の屍の山。それこそが周囲の静寂の理由だ。

それらを乗り越えて現れたのはひとりの少女だった。

無論、この少女として普通の少女ではない。

この場所、魔物領にいるに足る理由をもっていた。

彼女の名はユキ。

魔人ラ・サイゼルの仕える者であり、女の子モンスター、フローズンを元にした使徒だ。

そんな彼女がバージルと知り合ったのは、それほど古い話ではない。

そう、あれは彼女の愛するべき馬鹿主、ラ・サイゼルの城にバージルが訪ねてきた時の事がきっかけだった。

まあ、サイゼルの持つ城は、城と言うよりも適当な魔物に作らせた一軒家程度でしかなく、基本的にサイゼル自身は魔王城に生活の拠点を置いているので、あまり使われないうち程度程度の扱いでしかないのだが、それでも拠点は拠点としてユキちゃんが管理している為、人間界の漫画とかで本棚が埋まっていたりと、割と彼女の好き放題にしている。その城にバージルが訪ねてきたのがきっかけだ。

「シャワーを貸してくれ」

「良いよー」

あれは激戦だった。

漫画を読んでいたらするという、崇高な使命を果たしていたユキちゃんの不意を突いて、堂々と正面突破し現れた魔剣士は、使徒という存在に怯む事無く、自らの要求を突きつけ、その要求を飲ませたのだから、敵ながらあつぱれというほか有るまい。

とユキちゃんの中では自己完結している。

他人から見れば？

さあ？ ユキちゃんはいいい女なので、他人からの視線とかで自分の行動を変えるなんて恥ずかしいまねはしないのだ。

この辺り、大好きな妹相手に、ツンデレへたれな態度をとり続けてしまう自らの主と、似て似つかない面だと自負しているが、ツンデレへたれではないサイゼルなど、サイゼルではないので、これはこれで良いのである。

それはさておき。

「それで、何のようだ？ 使徒ユキ」

「ユキちゃんが良いって言うてるのに、ケケケ、てめーも強情ですなー」

「それほど貴様に心許していない」

「かー攻略難度高すぎつ。そんな男はモテモテで女の子にぐっさり行かれちゃうぞ？」

「どうでも良い。それよりも用件を言え。貴様の戯れ言に付き合っつてやる義理はない」

「へいへい。ほんじやまあ本題に入りますけどー、うちの上司戻っつてきてますぜい」

「そうか」

「ほむ。そのまますぐに突撃ーつて訳ではない？」

「魔人の館に向かうのに、何の策もなく挑むはずがなかるう」

「それはそうですけど、その辺り案外無鉄砲かと思わないにもあらずと言いますか、存外慎重？」

「殺し合いに行くのではなく交渉に向かうわけだからな。策の一つや二つ用意はする」

「交渉？ ああ、そのIQ4くらいしかないうちの上司と？」

「サボテンよりマシ程度しかないIQの魔人か。悲しくなる話だ」

「うーむむしろサボテンにIQがあつたとはユキちゃん驚き」

くだらない、されど楽しい会話を続けながらバージルは腰の闇魔刀を一振り。

その一瞬でたき火の日はかき消え、辺りは暗闇と静寂に包まれる。

後に残るのはぶたばんばらの串焼きの香りと、無造作に積まれたモンスター達の死骸よりこぼれる血の香りだけ。

バージルは立ち上がりながら串を取った。

そして一応というようにユキに向かって串を差し出すと、彼女は喜んでその串焼きを食べ始めた。

それを見ながらバージルも串焼きを口に運び、僅かの間に串だけにすると、未だに頬

張っているユキに向かって問いかけた。

「二応、顔つなぎは任せだが、構わなかったのか？ 使徒ユキ」

「まー、ユキちゃん的にあんたほどの相手に狙われた場合、自分でどうしようも出来ないんで、とりあえず上司にぶん投げるのが正解、みたいな？ うちの上司理不尽ぶん投げられても死にはしないし。そもそもユキちゃん、あんたの目的はおろか、名前さえ知らないしー」

「そういえば、目的も何も話してはいなかったか」

「そそ。ま、確かに同じ気配を感じるし、うちのあほ上司にちよつかいをかけるつもりはなさそうって事程度しか理解してないわけで、とりあえず交渉の着地点だけは知っておきたいみたいな？」

「今回の交渉の着地点はラ・サイゼル。やつの血だ」

「ほむほむ、ご同輩になりたいと？」

「あくまで目的における過程、一時的な物ではあるがな」

「裏切る前提とかマジかよこいつ。あ、でもうちの上司馬鹿だから、下級使徒とかそんな器用なまねできないと思うけど。そのへんは？ 一度使徒になった後解除するなんて出来ないし、うちの上司の首を取らせる事はさせないよ？」

軽い言葉のうちに秘められた言葉の刃。

その言葉こそが、彼女の本心なのだろう。

狂気に落ちていると見せかけて、忠節の鏡。

それがユキという使徒の在り方だ。

誰に理解される事も願わず、ただ自らの主が平穩無事に生きてさえいてくれば良いと尽くす。その有様は、従者としては間違ひなく完璧だった。

普段からこうであれば、彼女もあるいは彼女の主の評価も変わるのであろうが、彼女にとつて今の評価が一番、彼女を守りやすい状況なのだろう。

名は売れすぎても、売れなさすぎても害をもたらず。

そのことをバージルは理解していた。その理解が、ユキの有能さをこれ以上無く示すのだが、そのことに気付いている者は魔物領にはいないらしい。少なくとも悟らせないほどには彼女は逝かれていて、同時に聡明だった。

だからこそ、バージルはユキの問いかけに真摯に答えた。

「もとより、ラ・サイゼルの首自体に興味は無い」

「ほう。ならば体には興味があるって事ですかい？ やだ、大胆な告白ユキちゃんこまっちゃーう」

「下らない戯れ言で茶化しても、俺の真意は同じだ。言っているだろう。俺の目的はラ・サイゼル。その身に流れる血だと。その血を受けるのに、一番手っ取り早く穏便なのが使徒として奴に仕える事。それが俺の真意だ」

「……ケケケケ。嘘は言っていないみたいなんだよねー。……が、解せない。何でうちの上司？ 狙い所なら幾らでもあると思うんだけど。アンタほどの実力者であれば、それこそ、カミーラ様とかその辺の魔人四天王辺りに取り入る事も可能だと思うけど？」

「魔人四天王の使徒になど取り立てられれば、忙しすぎて自由時間などなさそうだからな。俺の目的を果たす為には、危険であろうとも直接ラ・サイゼルに取り入るしか無い。……等という通り一遍の回答が聞きたいというわけではなさそうだな、使徒ユキ」

「ケケケ。……分かつてるならさつさと……」

「真意にこれ以上の意味は無い。無論伝えていない意図はあるがその意図を語るつもりもまた、無い」

そうバージルは言い切ると刀の鯉口を切った。そして、ため息をつきながらユキへと促す。

「そして、もとよりこのつもりだろう貴様？」

「ケケケケケケ。ユキちゃん何のことかわかんない」

「ふん、食えぬ奴だ」

野営地の周囲には数百、下手をすれば千を超えるモンスターの屍が転がっていた。

統率されていたわけでも、何者かに率いられていたわけでも、魔王軍の部隊というわけでもないが、その千もの数の魔物達がバージルに襲いかかったのは事実だ。

それも、バージルがこの魔物界に入ってから既に八度目。

連日に渡ってである。

この現象を偶然で済ませてやれるほど、バージルは脳天気ではない。

ならば。

誰かがバージルのいる場所に魔物の群れを誘導したのだろうと言う事は、子供であっても予測がつく。

切り捨てた魔物の数は一日に千を超える。

だと言うのに、バージルには一切疲労が見えなかった。それどころか服に汚れさえついていない。

そういう意味ではこれから起こる事は予定調和だ。

無論ユキはバージルを全力で殺しに行く。

主を裏切る事を公言するような獅子身中の虫を迎え入れる事など、サイゼルにとって

百害あって一利なしだからだ。

だが、まあ、勝てないだろう事は幾度もけしかけた魔物戦でおおよそ理解している。踊るように、あるいは楽しむように、それとも見せつけるように剣を振るっていたバージルと敵対して勝てるビジョンは見当たらない。性格面においても油断した力を抜いてくれるような相手ではないとも理解していた。

「でもまあ、社畜はつらいって事で」

ぼやくようにつぶやきながら抜き放つのは巨大なマジックハンド。

冷気を纏い、魔力を滾らせ、初手より全力でユキはバージルへと襲いかかった。

その戦いを語るまでもない。

ほぼ一瞬でけりがついた。

当然のように頭と胴体が泣き別れの状態にされ、胴体の方は次元斬で粉みじんに消し飛ばされた。

頭だけになったユキをつかみ、バージルは目的地へと向かう。

目指すべきはサイゼルの居城である。

「あ、このままで行くと言ゼル様激おこになるんじゃない？ そうなると交渉も何もないじゃん？ と言うわけで、ユキちゃんのことを離して胴体復活させてから行かない？」

「怒り狂った魔人と闘える機会は貴重だ。その機会を態々逃すほど、俺は悠長ではない」

「ケケケケケケ。ホントに狂ってやがるな、てめえ」

「楽しすぎて狂ってしまいそうなのは認めるよ」

Mission 11 魔人ラ・サイゼル

ユキの首をはねた後、彼女のために紅茶を入れて魔人ラ・サイゼルの城にて振る舞う。なるほど、言葉尻だけ聴けば狂気の沙汰だ。

だがまあ、この使徒相手にはこんな対応で構わないだろうとバージルは半ば投げやりに思っていた。

「おいおい、グラグラ煮えてるじゃねーか。紅茶の入れ方も知らないとかどこのお坊ちやまだ、てめえ」

「生憎、味を気にする質ではなかったんでな。そも、首だけになって飲めるのか？」

「は？ 飲めるわけねーだろ。常識で考えてくれませんかねえ。ケケケケケ」

「だろうとは思っていたが、それは演技なのか本気なのか判別がつかんな」

「んー？ 演技かもしれないし、演技じゃないかも？ まあユキちゃん的にはどっちでも？」

「そうか」

良いながら窓際のテーブルにユキの首を置き、その生首に相對するようにバージルもいすに腰掛ける。

すると、軽い足音を人ならざる気配を感じ取った。

この城……一軒家の主。ラ・サイゼルだろう。

「ただいまー。ユキー？ いるー？」

「はいはいここにおりますぜーサイゼル様ー。ちいっとばかり衝撃的姿で客もいますけど。」

「客ー？ 火炎書士か誰か？」

「火炎ちゃんなら良かったんですけどねー。いわゆる招かれざる客って奴ですよー」

「は？ いや、だったらさっさとたたき出しなさいよ……？」

そう言いながら、ユキ言葉の元へとサイゼルはたどり着いた。

そこで見たのは、優雅にカップを薫らせるバージルと、首だけの姿となつてその前に置かれている首だけとなつたユキの姿だ。

サイゼルは自分自身で使徒の事をそんなにかわいがつていないと思つていた。

感性が常人とあまりにも異なつている彼女のことを可愛がるような酔狂では、自分ではないと。

だから、存外自分は酔狂だったのだと驚いた。

故に。

「氷雪吹雪」

何の躊躇いもなく魔法を放つ。

逃がすつもりのない範囲攻撃。

部屋一つを当然のように埋め尽くすその一撃は、絶対に回避を許さないという彼女の強い意志と殺意が垣間見える。

それをバージルはもろに受けた。

回避しようが無い、必中必殺の一撃は一瞬でバージルの凍結させた。

「……で？ 何でアンタは首だけにされてるのよ？」

「この兄ちゃんにちよっかいかけたら返り討ちにされた、みたいなの？ んで首ちょんばされて体粉々にされて愉快的オブジェ状態に。ケケケケ、ウケる」

「いや、全然ウケないんだけど……」

「まあまあ、そんな事よりもその兄ちゃんそんなくらい強いんですよサイゼル様」

「は？ まあ、使徒のアンタが後れを取るくらいだから、そりゃ強かったんでしょうけど。……何が言いたいわけ？」

「つまり、そいつ死んでねーっすよ？」

その言葉と同時に氷が砕ける音が響き、サイゼルの首筋に力がかかるのが分かった。

襟首を捕まれて投げ飛ばされそうになっている。

そう認識できた頃には、既にバージルの行動は完了しており、窓より家の外に向かって投げ飛ばされていた。

地面に叩き付けられる前に気づけたのは奇跡に近い。

空中でくると回り、翼をもって羽ばたいて滞空しながら自身の家の方を眺めてみれば、投げ出された窓では、バージルが態々ユキの頭を窓際に置いているのが見えた。

「ケケケケ。余裕だなテメエ」

「ふん。同僚になる者の力量把握はしておきたいだろうとの配慮のつもりだったが、余計な世話だったか？」

「ケケツ。ケケケケケケケケケケ」

この状況下。

魔人という絶対強者に敵意を、あるいはそれを越えた殺意を向けられているというのに、普段の冷静なそぶりを崩さないバージルの在り方に、ユキはこいつの方こそよほど

狂っていると笑い転げた。

ふわりと窓より音もなく着地するバール。

そんな彼を強敵と見なしたか、魔人ラ・サイゼルは魔力を滾らせながら自身の得物。
氷結の女神をバールへと向ける。

魔力充足。

即座に射撃。

並のスノーレーザーの威力を上回る大魔法にも似たそれを、バールは余裕を持って回避してみせる。

即着する魔法をかわす絶技。

その息飲む力量さえどうでも良いと切り捨てて、サイゼルは冷徹に思考を巡らせながら魔法の連射という手段をとった。

しかし、それでさえバールにはかすりもしない。

されど、それで良いと、上から見下ろすサイゼルは射撃を続ける。

着弾した場所が凍り付き、バールの周囲を埋めていく。

少しずつ足場を凍らせる事で、逃げ場をなくす彼女らしからぬ迂遠な一手はさりとして見ているユキをしてうならせる戦略だ。

本当にらしくない。

激情に身を任せて突撃するかと思いきや、上空より一方的に撃ち続けその上で相手の退路を少しずつつぶして最後に。

「終わり」

詰めに放つのは最初に放った僅かに為を用いる高威力の一撃。

直撃すれば人間はおろか、同じ魔人であってもただでは済まないほどに威力を高めたその一撃。

それを逃げ場を失ったバージルに向けて放つ。

恐ろしいほどに冷徹かつ、完璧な回答だ。

少なくともこの戦術をとられては普通の人間では彼女に太刀打ちできる者はいないだろう。

人は空を飛べず、あらゆる遠距離攻撃は魔人であるサイゼルの前には無力なのだ。

無敵結界。

人と魔人、魔王を隔てる絶対的な神の法。

それをためらいなく駆使した戦い方は見ているユキをして戦慄させた。

「そう。それが一番強い」

故に。

サイゼルが魔力を溜める僅かな間隙。

その時につぶやかれたバージルの一言は、あまりにも余裕が過ぎて。

「だから、その手を取らせるために貴様を利用して貰ったぞ、ユキ」

直撃する。

その一瞬前。

バージルがその剣を抜き放ち、円を描くように闇魔刀をぐるりと回した。

軽く回されたように見えたその刃は、直撃するはずだった高出力のスノーレーザーを絡め取り。そして、そのまま打ち返す。

「なっ!？」

驚愕の声音は主従の多重奏で辺りに響く。

スノーレーザーは高出力であればあるほど威力が高くなる。

されど、それは同時に魔法に物理の要素を付与する事にも等しい。

スノーレーザーの高出力化とは即ちレーザーの極低温化である。

スノーレーザーの出力が高くなればなるほど、レーザーの温度は低温限界、絶対零度に近づいていく。

そうする事で、威力が上がリ触れる者全てを凍らせる一撃へと変貌していくのだが、そこにこそ数少ないサイゼルの突破方法をバージルは見いだした。

絶対零度に近づけば近づくほど、あらゆる物を凍らせる魔の一撃に変わっていくのは確かだ。

だが同時にそれはレーザーが直進する大気に含まれた水分を、あるいは大気そのものを凍らせて物理的エネルギー、運動エネルギーを纏う事に等しい。そして運動エネルギーを纏った凍てついた物体は物理の範疇だ。

故に。

音速を超え亜光速に近いスノーレーザーも運動エネルギーを発生させたがために若干その推進速度を落とす、同時に物理的干渉があるのであれば、そのまま跳ね返す事もまた物理的干渉で可能だと、バージルは考えたわけだ。

とはいえ、それは机上の空論だ。

いくら何でもレーザーを打ち返すなんて行為、出来るはずがない。

いくらバージルの力量が人知を越えた領域にあるとして、まず反応速度が追いついて

こないはずだ。

それこそ、どこに着弾するかあらかじめ理解していなければ。

と、そこまで考えてユキはバージルの言葉を思い出した。

自分を利用して貰ったと言う言葉それは、即ち。

彼女を利用してサイゼルを激昂させる事で、人間相手に本気の手段をとらせるために利用するという意味にほかならないという事を。

激高した彼女が有無を言わさずバージルの攻撃する事も、絶対に人間では手を出せないであろう領域に舞い上がる事も、そしてそこからとるであろう手段に至るまで完璧に計算され尽くしている。

その上で導き出された作戦だ。

いくら最強の手段をとったとて、彼女が一瞬で考えている作戦である以上その精度がバージルが用意していた物に劣るのは自明の理。

故に、目の前の結果は必然だったか。

墜ちる。

自身のスノーレーザーを跳ね返されて、翼に着弾した結果凍てついた翼をもつては空に有り続ける事かなわず。

それでも、着地時の衝撃に耐えてサイゼルはバージルをにらみつけた。凍った翼は動かない。

墜ちた衝撃は彼女の全身を強くたたき、その身をふらふらにしている。

だが、それだけだ。

無敵結界は未だに健在。

魔力だつてまだまだ残っている。

この程度で負けるつもりはない。

その意思を強くのせて視線を向けたバージルの姿は、されどその好機を逃す事無く詰めてきていた。

目の前に現れる。

そしてバージルは閻魔刀を振り抜いた。

ぐしやりと何かが叩き付けられたような音が響く。

そして同時にバキンと何かが壊れたような甲高い音も。

瞬間、サイゼルに痛みが走る。

無敵結界を貫通してサイゼルの翼が砕かれた痛みだ。

信じがたい痛みに、あるいは人間にこんな痛みを与えられるとは思ってもいなかったが故の痛みに彼女は絶叫した。

何故、どうしてという感情が彼女の意識を満たす。

しかしその答えは与えられない事無く、再度振りかぶり振り抜かれた一撃は、凄まじい痛みと衝撃を伴って、彼女の頭部を強打し、今度こそ彼女の意識を虚空へと導いた。

Mission 12 理由

ラ・サイゼルを撃破した。

その結果を結論だけ言えば、死ぬほどに痛い。

冷気によって痛覚が鈍化しているとはいえ、魂まで凍らされていくのではないかと錯覚するほどの痛みを、冷や汗のみで堪えながらバージルは地面に倒れ伏しているサイゼルを担ぎ上げた。

全力で魔力を凍結している右腕の治癒……と言うよりも凍結浸食の防止にあてながらサイゼルの家に入ると、リビングに設置してあるソファアに彼女を寝かせ、そのままの足で先ほどまで紅茶を楽しんでいたテーブルへと向かう。

「すごいなお前。……信じられません」

どうやってと聴きたそうなユキを無視して煮立っていた紅茶のポットを手に取ると、その中身はサイゼルの氷結吹雪で凍り付かずに熱湯程度にまで温度が下がっていた。

十分だと判断してその中身を右腕にぶちまける。

凍り付いていた右腕が少しずつ溶け始めるのを確認して、それでもぶちまけた紅茶が凍り付くが、だいぶ右腕の温度が上がり、氷結浸食も止まった事を確認して窓より右腕を出し、力をこめた。

表面を覆っていた氷が砕けて散り、太陽光に照らされて輝きを室内に取り込む。

僅かな間の幻想的な光景。それに感慨を抱くわけでもなく、バージルはテーブルのイスへと腰を下ろした。

「信じがたいというのは分かる。聴きたい事は無敵結界、その抜き方あたりか？」

「まあ、そうですね。その辺りについてはどうやって貫通させたのか興味は尽きません。……大方の予想はついていますが」

「ふん、ならばその予想は当たりだ。神の定めた法則は絶対だが、魔王の望んだ願いは完璧ではなかったたと言うわけだ」

「具体的には？」

「俺の右腕が凍っていたのは見たな。あの氷結現象の元はサイゼルのものだ。その魔力に運動エネルギーを与えてやれば、それによつて発生する物理的衝撃は彼女の魔力を纏ったものになる。言い換えれば俺は彼女が放ったスノーレーザーを跳ね返したのと同義の行動を行ったのと同じになる。結果だけを切り取ってみれば、彼女は自傷したと、そういう事になるわけだ」

「ふうん？ いや、でもそれはおかしな話です。それならば魔人が一時付与の魔法を使えば、無敵境界持ちにもダメージを与えられる事になるはずです。ですが、そんな事が起きたなんて今まで聴いた事もない」

「そんな事が起こる自体が稀だと言うだけでは納得しないならそうだな、魔力に込められた意思が違うとでも言うべきか。一時付与、エンチャントの術式はあくまで援護の術理。そこに込める魔力も攻性魔法の物とは微妙に違ってくる。術理、込める魔力の種類、量を適切に運用する事が魔法の基礎で有り奥義だ。ならば、その三種全てが違ったものであればそれはもはや別種の魔法となるのは必然で、別種の魔法であれば発生する結果もまた違うものになるのもまた同じく。結果は見ての通りというわけだ」

「ふむ。ならどうやって一撃で？ 魔人というのは種族的にそもそもからしてタフ。サイゼルのレベルだつて三桁。貴方の力量を疑うわけではありませんが、一撃で意識を刈り取る事が出来るほど貴方とサイゼル様との間に隔絶した力の差があるとは思えない。その点はどうやって？」

「油断と意識の間隙。そこを突いた」

「意識の間隙までは理解できません。自身の翼が凍らされその上で砕かれた。痛みは凄絶でしょうし、サイゼル様が貴方より意識を逸らす、痛みに意識が取られる自明の理です。しかし、油断？」

「あるいは無敵結界に慣れすぎたが故の弊害とでも言うべきか。サイゼル、と言うよりも魔人という種族はその強大な無敵結界を纏うが為に戦う者として絶望的なまでに痛みの許容量が低い。まあ、慣れていないわけだ、特にサイゼルは生まれてこの方魔人としてあり続ける者。そんな彼女が墜落したときのダメージに加え、翼を根元から粉砕された痛みを堪え切れた。それだけでまあ及第点、その上で顎を砕く勢いで打ち抜かれて

脳を揺らされたんだ。意識なんぞ保てるはずがない」

その言葉にユキは再びの戦慄を抱いた。

それはすらすらとバージルが作戦を説明できたからではない。

最初から魔人に挑むつもり男だ。ならば魔人を打ち倒しうる作戦を立てるまでは理解できる。

故にこの男に戦慄すべきはその作戦立案能力でも、作戦実行能力でも無い。

無論、それらの能力、特にやり通す意志の強さは特筆すべきだろうが、何よりも警戒すべきなのはバージルの情報調査能力だ。

この男、どうやってここまで精緻な情報を得たのか。

バージルがつつらと当然のように話したサイゼルに対する作戦。そこに含まれているサイゼルに対する情報量は、人類圏で集められるような量と正確さではない。何せサイゼルの使徒であるユキでさえ知らないような情報まで網羅してあるのだから。

思い返してみればユキに対する情報もおかしいほどに持ち得ている。

何せ首をはねられて肉体を粉々にされて、なお当然のように生きているユキ自身を見て、一片の驚きを見せる事すらなく、当然のように警戒を続けるのだから、完全にユキの奥の手まで知っているのだろう。

「なるほど」

呟きながらユキは首から下を生み出しながらテーブルの横に立つ。

そして、おもむろにマジックハンドをバージルに突きつけた。

「つまり、この距離でアンタを殺せば問題ない訳ね」

「ふん。遅いお目覚めだなサイゼル」

「呼び捨てにするな」

ユキが武器を突きつけると同時に、サイゼルがバージルの死角より氷結の女神クールゴードスを突きつけていた。

無論、バージルの死角から突きつけているとはいえ、その状況下に置かれるまでバージルが気がつかなかったわけではない。気付いていた。しかし、捨て置いても構わないと判断したが為の放置だった。

それを理解しているが為にサイゼルの放つ殺意は凄まじい。

魔人としてプライドをこうまで逆撫でされれば、この殺意も納得かとユキは自身の主の態度にため息をついた。

納得は出来るがもう少し考えて欲しいものではある。あるが、この直情性はサイゼルのよい部分でもある。だからこそ、ユキは口答えする事もなく彼女の意向に沿ったのだ。

「俺を殺すか？ サイゼル」

「この状況で殺されないなんて、高をくくるのアンタ？」

「いや、そうは言わないが、随分と理不尽な話だと思っただけだ。俺は貴様の使徒に襲われてそれを殺さずに見逃し、その上で貴様の事まで殺さずにすましたというのにな？」

肩をすくめながらそう言ったバージルに対して、サイゼルはさらに怒りを強めた。

この期に及んで挑発を続けるバージルの姿にユキもため息をつく。

そのタイミングでバージルは自然にイスより立ち上がった。武器を突きつけられている、その状況に変わりなく、死が目の前に迫っているというのに悠然と。

あまりにも自然に立ち上がったためか、サイゼルは一瞬引き金を引く事をためらった。その間隙を突いてバージルはユキによって突きつけられた武器をかくぐりサイ

ゼルの懐へと抜刀しながら飛び込む。

抜き放たれた閻魔刀はサイゼルの氷結クールゴージェスの女神を押しさえこみつばぜり合いのような状況になった。

ちりちりと鋼が削られる音が響き、火花散って周囲を照らす。

「氷結クールゴージェスの女神を押しさえ込んだところで、アンタを殺すくらいわけないけど？」

「その代わり、氷結クールゴージェスの女神は使い物になら無くさせて貰うが？」

「……チツ」

バールジルの言葉に舌打ちを漏らす。

油断はなかった。

一戦目で破れている以上それは当然だ。

だが、まさか引き金を引くまでの僅かな間隙を利用して氷結クールゴージェスの女神を質に取ってくるとは考えていなかった。

壊される事は好ましくない。

壊されてしまえば修理が必要になる。

となれば、他の魔人の手を借りる必要が出てくる。そして手を借りるには、どうして壊れたかの理由を話さなくてはならないだろう。

それでは、目の前の男を始末する意味が無い。

それが理解できるから漏れた舌打ちだった。

「それで、アンタは何を望むの？」

金属がこすれる音、つばぜり合いの状況から逃れさせてくれないバージルの力量に内心舌を巻きながら、サイゼルが問いかけた。

その目には一瞬でも手を抜けば殺してやるという意図がありありと写っている。

それ故にバージルも一切の手加減なく全力でサイゼルを押しさえ込む。

サイゼルを逃さず、同時にバージルを攻めさせないように技巧を持つて。

言うだけは易く、行うは難しを地でいくその力量の高さにユキは傍目より見ていてため息をついた。

純粹な身体能力という意味ではバージルの肉体強化魔法を込みでも、サイゼルには決して届かない。

魔人とただ人との間には、生涯を賭けて鍛え上げているバージルでも埋めがたい差がある。

細身の少女に見えるサイゼルであっても、その身体能力はバージルのそれを越えている。そんな相手を力量のみで押しさえ込むというのは、軽く見積もつても絶技と呼ぶほかはない。

だからこそ、サイゼルの問いかけにユキもまた興味を抱いていた。これほどの力量を

この若さをして抱く彼が望む物。それは一体何なのかと疑問に思う事は不自然ではない。

人間界においてと言うくくりであれば、富も、名声も、女も、およそ人間が抱くであろう欲求の全てを彼は手に入れるに足る力を持つ。だから。

「そんなものは決まっている」

当然のように彼が口にした言葉は二人を絶句させた。

「I ^{もっ} need ^と more ^カ power ^を そのために、貴様の力をよこせ、ラ・サイゼル」

Mission 13 血の契約

「それは、つまり私を殺して魔人に成り代わる。そういうことでもいいわけ？」

「まさか。そんな理由であるなら貴様にこんなことを言いはしない」

「なら、どういうつもり？ 事と次第によつては、今度こそ貴方を本気で殺すけど」
「出来もしない事は言わない方が身のためだ」

バージルの挑発に応じるようにサイゼルは氷結クールゴードスの女神に魔力を集中させて解き放つた。

全力ではないといえ魔人の一撃たる絶氷の一撃は、氷結クールゴードスの女神の砲身を逸らされた事で、バージルに掠める事さえなく窓に着弾し、ガラス代わりに氷の窓を作った。

ギリギリと軋む音が強くなり、周囲に響き渡る。

その強まる音に呼応するように、サイゼルが放つ殺気も今までの物とは比べものにならないほどに強くなっている。

瞬間、バージルが力を抜いた。

つばぜり合いをしていたサイゼルの体が僅かに泳ぐ。

その小さな隙を突いてバージルはサイゼルの足を払うと、そのまま首と氷結クールゴードスの女神の両方に刃がかかるように闇魔刀を突きつけながら彼女を押しさえ込んだ。

普段のサイゼルであればこんな不覚は取らないだろう。

しかし、今のサイゼルは翼を砕かれている。

その状況下で地面を踏みしめる足を払われた以上、彼女に対応は難しかった。

「チツ。……それで？　ここからどうするの？　押しさえ込まれているとはいえ私は魔人よ？　貴方では絶対に殺せない。……私の力は奪えない」

「知っている。もとより、魔人になど成るつもりはない」

「へえ。それじゃあ、どうするつもりなの貴方」

「取引だ、ラ・サイゼル」

「取引？　押し売りの間違いじゃなくて？」

「そうさせたのは貴様の使徒だ。俺は身にかかる火の粉を払ったに過ぎない」

「ふん」

「ケケケ」

バージルの言葉にサイゼルは無然とした態度を、そしてユキは笑い声をもって答えました。

サイゼルの態度は、この状況が自身の使徒によってもたらされた事に対する肯定であり、ユキの態度はこの状況を作ってしまった自身の失策に対する乾いた笑いだ。そんな笑いをこぼす事はユキにとっては珍しい。

基本的にうまく立ち回る事を得意とする彼女が、主の判断を仰がずにここまで大きな失策を犯した事は初めてだった。

まあ、でも仕方が無いとユキは思った。目の前の男は自分が判断を失敗してしまう程度には超人めいた実力を持っていたのだから。

「話を戻すぞ、ラ・サイゼル。俺をお前の使徒にしろ」

「ふうん？ ま、そんな事だろうと思ったけど、この状況下で私が貴方を使徒にする意味は？」

「実益として俺が貴様の配下として動く事になる。俺自身の実力は貴様自身体験しているだろう？」

「ま、そうね。認めてあげるわ。貴方の力は並のそれじゃない。だけど……」

「感情が納得しないか。ふん、利益のみで転べば良い者を。面倒な女だ」

「ま、その面倒くささも含めてうちの上司なんで、やめとくなら今のうちでっせー」
「ちよつと、ユキ。どういう意味かしら、それ」

「ケケケ」

押さえ込まれながらも器用にユキと口げんかを始めるサイゼル。

その様子を見て、バージルは呆れを多分に含んだため息を漏らす。そのため息を聞きつけたユキがからかうようにバージルへと問いかけた。

「こういう上司で、こういう部下だと貴方は知っていたみたいですけど、それでも何故サイゼル様を？ 貴方なら、それこそ他の魔人。魔人四天王の方々や魔人筆頭様、あるいは魔王様に見いだされる事さえ可能でしょうに」

「理由は幾つかある。魔王、魔人について調べ上げ、その上で精査した結果を基に判断した。主として仕えるなら、ラ・サイゼルが最善だと」

「ふうん？ それは、ハウゼルよりもって事で良いのかしら？」

「無論、ハウゼルも検討に値する魔人ではあるが、ラ・サイゼルと比べると選ぶに足る理由は弱い」

バージルのその言葉を聞いて、サイゼルは少しだけ機嫌がよくなった。

自分の事をよく出来た妹より評価している。その言葉は、サイゼルが望んで望んでそして得られる事がなかったもの。自身を押しさえ込むほどの力量を持つ男にそのように評価される事は満更では無い。

「うわ、うちの上司チョロすぎ。って理由で選んだ訳か？」

「いや、チョロさと言う意味ではハウゼルに取り入る方が楽だろう。希少本でも探して自分売り込んでいけば、程なく下級使徒にはしてもらえらるだろうあの子」

バージルの言葉にユキは苦笑をこぼすしか出来なかった。

何故、ハウゼルの性格を熟知しているのかなどと聞くつもりはないが、どこまで調べているのか、どうやって調べたのかという点は純粋な興味を抱く。もともと、答えてはくれないだろうが。

「取引成立ね。良いわ、貴方を私の使徒にしてあげる」

「そうか。それはありがたい」

にこやかにそう言ったサイゼルをバージルは即座に引き起こす。そしてゆっくりと閻魔刀を納刀すると、そのままサイゼルの前に跪いた。

「名はバージル。姓は無し。我が願望成就するその時まで、この技、この知謀、この身の全てを貴方に捧げる事をここに誓おう」

「そう。永遠にじゃないのね」

「無論。だが、契約の満了後も三回は貴方の手助けをしよう」

「随分と身勝手な話。腹立たしいくらい。でも知ってる？ 血の契約を結ぶと私に逆らえなくなるって事」

「ふん。まさか、下級使徒をすつ飛ばして血の契約を結んでくれるのか？」

「ええ。アンタがそれを望みそうにないから。半分嫌がらせよ」

「嫌がらせで使徒を増やすのか。……血の契約は魔人としての力を譲渡する契約。理解しているんだろう？」

「譲渡した分以上の働きはしてくれませんか？」

「主が望むとあれば……な」

そう言ってバージルは説得をあきらめた。

下級使徒でも十分のつもりだったが、使徒となれるのであればそれを拒む理由はない。

ちらりと視線をユキに向けてみれば、彼女は面白そうな物を見る目でバージル達を眺めていた。どうやら止める気は無いらしい。

「契約の時くらい、こっちを見なさいよバージル」

「ああ」

面白くなさげな声音でサイゼルが言った。

それに答えて正面を向けば、そこにはサイゼルの顔がドアップであった。

まるで、キスでもするかのような距離。

だがバージルは一切の動揺を見せない。そんな彼を見てサイゼルは小さく漏らした。

「ホント、生意気な男」

「性分だ」

「その性根、心底まで酔わせてあげるから」

「ふん、出来るものならな」

軽口を言い合いつつ、サイゼルはその口元をバージルの首筋から肩のラインに近づけた。

ぺろりと小さく舌を出してそのあたりをなめると、わずかに塩の味がする。

自身の低温でバージルが身じろぎしないかと期待していたが、サイゼルの悪戯に対しても彼は一切の反応を見せるでもなく、淡々と彼女の行動を待っていた。

その態度が見透かされているようで少しばかり悔しい。

だが、悔しいからと言って血の契約を辞めるほど、この契約は軽くはない。

守り続けるつもりはないとバージルは言い切ったが、血の契約は基本的に永遠だ。永劫の長い時を共に過ごすという契約であり、魔的な儀式でありながら同時に神聖さすら宿す。

魔人にとつてしても使途にとつてしても侵すべからずなこの儀式を悠然と破ると言いつけるバージルの有様は、血の契約を理解しているうえでそう扱うのだから質が悪い。しかしまあ。

「長い命、時には質の悪い男に引つかかるのも経験かしら」

「いいから早くしろ」

「風情すらない男なんだから」

と言いつつも、サイゼルは血の契約を結ぶためにバージルの肌に犬歯を突き立てた。歯が肌を破り、赤い血潮が零れ落ちる。

味わうようにバージルの血を口の中で転がしながら、同時に自身の唇を噛むことで血を流してバージルのものと混ぜ合わせる。

そして先ほど傷つけたバージルの肌にその混ぜ合わせた血を注ぎ込もうとして、やめた。

「……おい？」

「こつちを向きなさいバージル」

「なに？」

バージルの問いかけには答えず、ただその魔人の膂力をもつて無理やりにバージルの唇を奪った。

目の目が合う。

悪戯っぽい光を宿すサイゼルとは違い、バージルの瞳には確かに驚きの色が宿っている。

口の中に溜まった自身とバージルの血の混合液を彼に送り込む。
ごくりと垂下する音がサイゼルとバージルの耳朵に嫌に大きく響いた。

「あは。驚いたかしら？」

「……」

唇を離して悪戯気な笑みを浮かべ、サイゼルはバージルにそう問いかけた。

その問いにバージルは答えることなく、彼女と自身の口元にできた赤い糸を鬱陶し気に切ると、そのまま体内に落ちていったサイゼルの血の感触を確かめる。

魔血魂の力の一部を宿す魔血はバージルの体の中でゆつくりと彼の体を変質させようとして。

「はっ」

その変質をバージルの魔力によって抑え込まれた。

そしてバージルの血液と混じり合い、使途とするために変質した魔血を無理やり右腕まで運ぶ。そこで、抑え込んでいた魔力を緩めることで使途への変質を開始させた。

「呆れた。そこまでして私の命令は聞きたくないってわけ？」

「というよりも右ひじから先だけで使途化させるとかそんなこと出来るんですね。ユキちゃん驚いちゃった」

「魔血による変質だって魔力による変質の一部に変わりはない。ならその変質をコントロールすることだって可能だろうさ。……命令に関しては命令されれば聞くとも」

「は……聞く気がないなら聞かずに済むってわけ？　なんだか、力だけただ取りされた気分」

その言葉にバージルは肩をすくめることで答えとした。

それはサイゼルの言葉を肯定しているような、していないような微妙な態度で、それを見せられたサイゼルは不機嫌になるしかなかった。

「貴様の命令が俺の判断より勝ると感じた場合は、無論命令に応じるさ」

「……本当に腹立たしい男」

Mission 14 魔王城の片隅で

魔人の使徒になったからと言って特段バージルの生活に変化はない。

日々鍛錬をこなし、新しい知識を蓄え、ダンジョンに潜りレベルを上げる。

そんなことを続けているバージルに、退屈したような声音でサイゼルがバージルに声をかけた。

「よくも飽きないわね」

「寸暇を惜しんで力をつけろと俺の魂ががなり立てる。俺はその魂の魄動のままに日々を過ごしているだけだ。故に、飽きている暇はない」

「そ。そんなアンタにいい場所を紹介してあげましょうか？」

「良いところ？」

「こそ、少しは主らしいところも見せておかないと、アンタ、あっさりと私のことを見捨ててしまえそうだし？ 強くなるためには知識の収集を惜しんではならない。……なんて、アンタには言うまでもなさそうだけど、このあたりで知識を得るためにはダン

ジョンに潜るくらいしかあてがないんでしょう?」

サイゼルの言葉にバージルはうなずきで肯定とした。

確かに現状では知識を得ようとすればダンジョンあたりに潜るしかない。

古代遺跡がダンジョンと化したその場所を調査することで、失われた知識を収集する。聞こえはいいが、効率的とは言えない。事実レベル上げも兼ねているのであれば妥協できる程度の知識しか、バージルは集められていなかった。

「あて、とは?」

「魔王様のお城。あそこにはこの魔物界の知識を収集した図書館があるのよ」

「ああ、なるほど。それを口実に妹に会いに行く?」

「……うるさいわね。悪いの?」

「いや、使徒思いの主様でありがたい限りだ。それで、どのくらいかかる?」

「ん? 半日も飛べばつくけど?」

「となれば、徒歩で三日程度か。」

「なに? 乗せて欲しいとかいうわけ? ……そうねえ、どうしてもって頼み込むなら

乗せてあげても」

「その必要はない。普通に、地面を蹴って貴様に追いつく」

「……あっそ」

「なぜ不機嫌になる」

「べつつにー。それじゃあ、とりあえずそれなりのスピードで飛ぶから、見失いそうになつたら声をかけなさい。特別に運んであげるから」

そういうとサイゼルは翼をはためかせて空に浮かぶ。

重力を感じさせない動きで中空に舞い上がる彼女を視界に入れつつ、バージルも鍛錬に用いていた閻魔刀を腰へ戻す。そして、移動を始めたサイゼルを追うように大地を蹴った。軽く、されど一瞬でトップスピードに。その速度は空を行くサイゼルに勝るとも劣らぬ速度だった。

魔王城。

魔王の住まう場所。

周囲を魔物が固め、建物自体が威圧感を放っているようにさえ感じさせるその場所にサイゼルとバージルは到着した。

ふわりと、サイゼルがバージルの目の前に着地して彼のほうを見てみれば、そこにはいつも通りの彼の姿があった。直線距離だとして、強行軍で三日以上はかかるであろう距離を半日そこそこで踏破したというのに、息の切れる様子すら見せていない。

その姿に本当に可愛げのない男だと、少しだけ不機嫌になりながら魔王城の門番に視線を向ける。すると、門番の魔物がゆっくりと扉を開いて招き入れられた。

「行くわよ、バージル」

「ああ」

バージルに全くの気負いは見て取れない。

使徒が初めて魔王城に訪れるときは、大抵の場合緊張しがちがちになるもののだが、目の前の男からは、まるで緊張したような様子が見られない。

悠々と、まるで勝手知ったる家に来ているかのように歩くその姿を、サイゼルは半目になりながら眺めていた。

「……なんだ？」

「少しは緊張しなさいよ。魔王城よ、ハイ」

「意味の分からん事を。緊張する意味は無いだろうに。所詮は上司の上司の家と言うだけ。来訪を拒まれていない以上、緊張するだけ無駄だ」

「ぼったり魔王様とご対面して事もあるかもしれないのに?」

「対面して何かあるのか? 挨拶して終わりだろうに。戦うわけでもなし、必要以上に恐れられる方が、魔王様としても気が悪いだろう」

ぼつさりと切って捨てるバージルの言葉にサイゼルは言葉を無くした。

確かに、ガイという現在の魔王は無意味な戦いを好む魔王ではない。

新入りの使徒に対して執着するような性格でもない。そうである以上、バージルの言っている事はこの上なく正しい。……正しいのだが。

「なんだかむかつくわね」

「そんなに人様が慌てふためく姿が見たかったのか?」

「別にそういうわけじゃ……有るけど、全く普段と変わらないってのは流石に予想外。少しくらいは慌てふためいてくれても良いのに。あのユキだって、一番最初は緊張してたんだから」

「そうか。その様子を見てみたくはあるな」

「でしよう？ で、今回はアンタのそれを見れると期待したんだけどねー」
「期待に添えず悪かったな」

そう言いつつバージルはサイゼルの腕を引く。

不意を突かれたサイゼルはバージルの胸元へと飛び込むような形となった。

そんな事をよもやバージルがすると思わなかったサイゼルは驚きの表情を彼へと向ける。視線を向けた彼は真剣な表情をで、サイゼルには一瞥もくれずただ、相対する者を見つめていた。

「……主が失礼するところだった」

「いえ、此方こそ少しばかり迂闊でした。鉢合わせにならずよかったです」

サイゼルをとなり立たせながらバージルは深々と頭を下げた。

相対していたのは金髪に紅瞳をもつ絶世の美男子だ。

気配から感じ取るに魔人。後ろに三人の使徒らしき女性を引き連れている。

容貌優れ、冷たささえ感じさせる美貌を持つ男の魔人とあればおのずとその名は絞られる。

大方のあたりをつけたあたりで、バージルの腕の中より抜け出したサイゼルが彼に声をかけた。

「……悪かったわねアイゼル」

「いえ、此方こそ。お互いに魔王様のお膝元にあつて、愛しい使徒達との会話に夢中になりすぎるのはよくありませんね」

「……私のは愛しいと言うよりも、腹立たしいという方が正しいけどね」

「ぶつからないように助けたというのに、ずいぶん言いぐさだな」
「敬意のかけらも見せないような使徒には、これで十分でしょう？」

サイゼルのその言葉にバージルは肩をすくめるだけで回答とした。

感謝はしているが敬意を抱いていないのは事実だからだ。

そんな主従関係を面白そうにアイゼルは眺めている。

そんなアイゼルに向かってバージルは一礼を伴って挨拶を行った。

「ああ、そういえばお初にお目にかかる。俺の名前はバージル。主、ラ・サイゼルに武芸と知謀を捧げた男だ。以後、お見知りおきを」

作法に則って行われた一礼は、サイゼルには見せた事のないもので、それが余計にサイゼルの神経を逆撫でする。

何より、捧げた物の中に忠誠が含まれていないところがサイゼルにとっては、本当に腹立たしい。

外部から見れば、サイゼルのために全力で役立つアピールをしているが、サイゼルから見れば未だ心服していない事の再確認をさせられているような物だった。

「……これはご丁寧に。私の名はアイゼル。後ろの三人は私の使徒、それぞれ、トパーズ、ガーネット、サファイア。あなたも使徒の名に恥じぬ活躍を期待していますよ、バージル」

アイゼルの言葉にバージルは頭を下げるだけで何も答えを返さなかった。

黙して語らず結果だけを見せる。その意気を感じ取ったアイゼルは、サイゼルの評価を少し上向ける。使徒というのは主の人を見る目を如実に反映させるからだ。

そういう意味では目の前のバージルという男はほぼ完璧だった。

礼儀作法に通じ、主を立てつつも、自身の實力にしっかりとした自負を持つ。

その実力が魔軍の中でどれほど通用するかはアイゼルには分からないが、目の前のサイゼルという魔人はほとんど使徒を作らない魔人だ。そんな彼女が抜擢したのだから実力は折り紙付なのだろうと判断できた。

「もう行くけど、いい？ アイゼル」

「ええ、此方こそ、長い間拘束して申し訳ありませんサイゼル」

「別に、今回の目的はバージルを図書館に案内する事だから、多少時間が取られた位で不満は抱かないわよ」

「おや、魔人である貴方が、直々に案内ですか？」

「そうよ。何か問題でもある？」

「いえ、問題はありませんが……」

随分と入れ込んでいるのだな。

少なくともアイゼルはサイゼルの態度を見てそう感じ取った。

使徒のために主であるサイゼル自ら魔王城の中を案内するなど、甲斐甲斐しいと言っても過言ではない。

何よりそのことにサイゼルが気がついていないらしいのがまた、彼女の入れ込み具合

を示している。

サイゼル、バージルと分かれた後、アイゼルはぼつりと小さく呟いた。

「あれは、主従の関係として歪にならなければ良いのですが」

「いや、あれは既に歪になっていますよアイゼル様」

後ろに控えていたアイゼルの三人の使徒達に問いかけるような、あるいは確信のを漏らしたかのような言葉は生憎、かしましくも否定されてしまったのであった。